Ⅱ　盛岡城跡の概要

1　盛岡城跡とその周辺の環境

（1）盛岡城跡の位置と地形

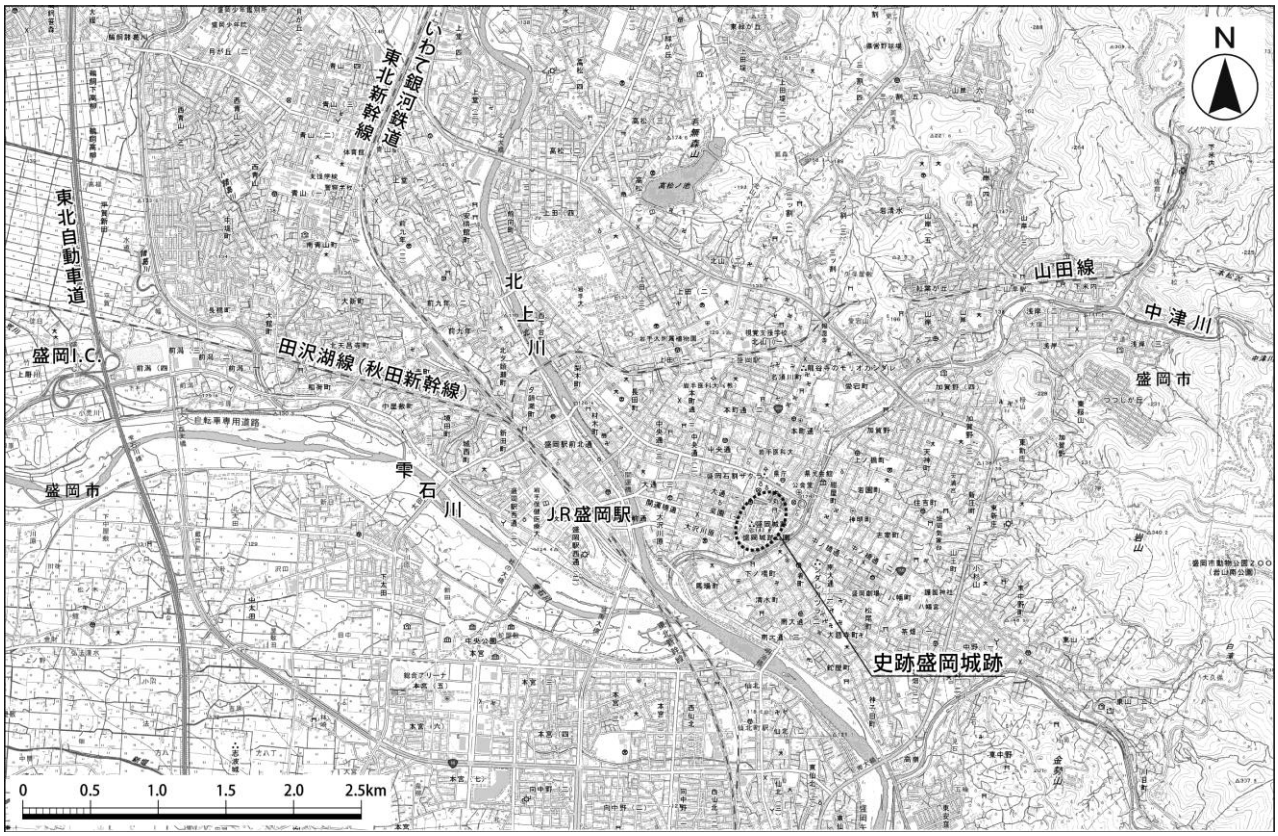
本市は、北上盆地を貫流する東北地方最大の河川である北上川と、奥羽山脈を水源とする雫石川、北上高地を水源とする中津川や簗川等が交わり、岩手山や姫神山等の象徴的な山並みを中心市街地から見ることのできるという水と緑に囲まれた都市である。

地形は概ね、北部と東西が山地及び丘陵地となっているほか、平地が南に開け、北上川、雫石川、中津川等の河川が流れる「蔵風得水（ぞうふうとくすい）」の地形となっており、風水思想によると都や城などの立地に適した地であるとされている。

盛岡城跡は盛岡市市街地の中心部である内丸に所在し、東日本旅客鉄道株式会社（ＪＲ東日本）盛岡駅から東に約 1.2キロメートル、徒歩で約15分の場所にある。

盛岡城が築かれる前の地形は、藩政時代に星川正甫（ほしかわせいほ）により編纂された地誌「盛岡砂子（もりおかすなこ）」に収録されている「盛岡舊図（もりおかきゅうず）」（10頁第２図）によると、北上川の流れは現在と異なっており、現在の旭橋付近から大通り・菜園方向に大きく蛇行して淡路館（あわじだて）・日戸館（ひのとだて）が立地する丘陵に突き当たり、丘陵の南側で中津川と合流していた様子が描かれている。また、雫石川が現在よりも南側を流れており、北上川との合流点も現在よりも南に位置していたことがうかがえる。

現在の北上川はＪＲ盛岡駅付近を南流して雫石川と合流しており、盛岡城築城当初よりも流路



第１図　史跡盛岡城跡の位置

が西に移っている。これは寛文13年（延宝元年1673）にはじまる河川改修によるもので、この工事の後に大沢川原や川原町といった新しい町がつくられている。

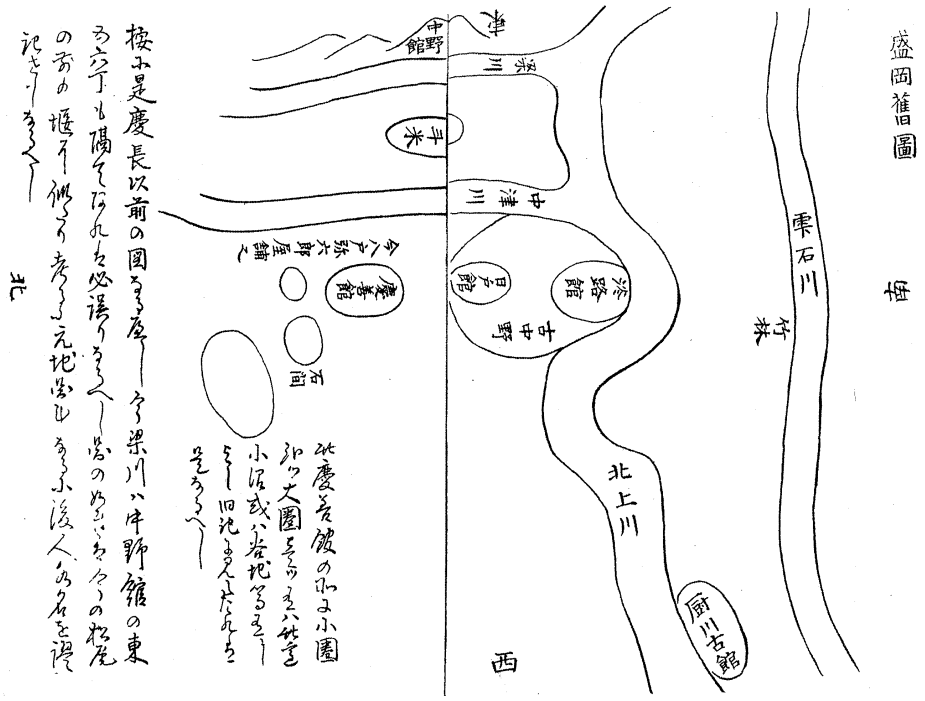
また、北上川と中津川との合流点の北側に、「古中野（こなかの）」と書かれた囲みが描かれ、その中に「淡路館（あわじだて）」・「日戸館（ひのとだて）」と記されている部分が見られる。この部分が現在の内曲輪（御城内）に相当する範囲で、「淡路館」は本丸・淡路丸に相当し、「日戸館」が三ノ丸に相当する範囲と想定されている。

さらに、古中野と書かれた範囲の北側には、「慶善館（けいぜんだて）」と書（か）かれた囲みと、「今ハ八戸弥六郎屋舗也」と記されている部分がみられるが、これは現在の岩手医科大学附属内丸メディカルセンター付近と想定している。この付近では、平成11年度に実施された発掘調査において、外曲輪周辺の土塁と堀跡が確認されたほか、土塁の下層からは慶善館の一部または周辺の屋敷跡と思われる16世紀の掘立柱建物跡が確認されている。

さらにこの「盛岡舊図」には、慶善館の北側に石間という地名のほかに、大小の楕円が３箇所記され、「此慶善館の北に小圏弐ツ、大圏壱ツ有ハ、此辺小沼或ハ谷地等有しよし、旧記に見へたれは是なるへし　按に是慶長以前の図なるへし」と記されている。これと現況を比較すると、現在の本町や名須川町付近には、沼または湿地が存在したことがうかがえる。（５頁第２図参照）

この付近については、元文年間（1736～1741）や寛延年間（1748～1751）の盛岡城下図（38頁に掲載）によれば、上田堤（現在の高松の池）や北山方面から湧水が流れ込み、三戸町付近を通り、遠曲輪の堀を通って旧北上川に流れ込む様子が描かれている。よって、これらの沼沢地を埋め立てて市街地を拡大するとともに、湧水や小河川を活用したまちづくりが行われたものと考えられる。

なお、これらの小河川・水路等については、近世以降から生活雑排水の排水路として使われていたが、戦後そのほとんどが衛生上の理由から暗渠化されるなど、大部分が改変を受けており、旧状を知ることが難しくなっている。



第２図　盛岡舊図（星川正甫「盛岡砂子」『南部叢書第１冊』より転載）

（２）地質

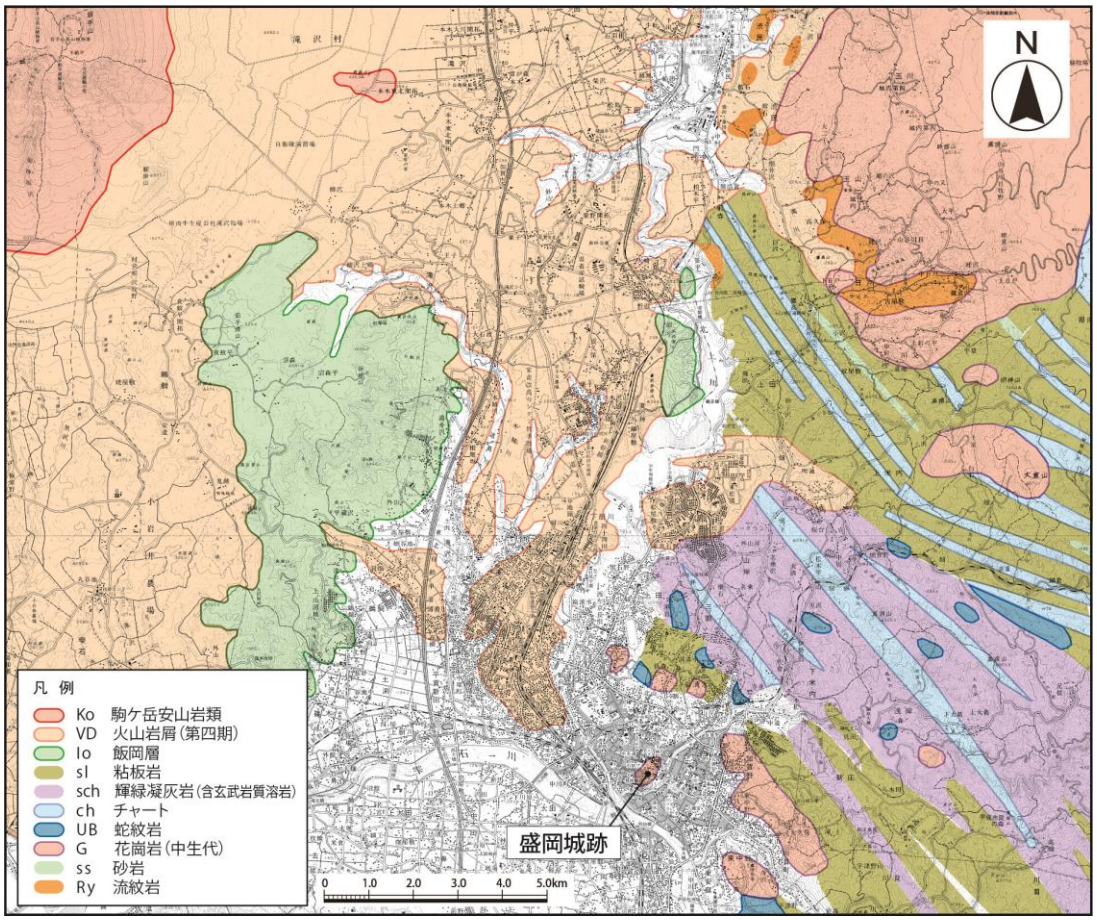
本市の市街地の大半は、北上川・雫石川・中津川等の河川が運んできた砂礫によって形成された扇状地上及び段丘上に立地し、地盤は概ね良好である。

市の山地地盤を構成する地質は東西で異なっており、東側の北上山地は、古生代・中生代に形成された堆積岩を中心とし、一部の地域には貫入による花崗岩が分布する。一方、西側の奥羽山脈は活火山の岩手山を除くと新第三紀の堆積岩及び火山岩が中心となる。

史跡周辺及び史跡指定地は、貫入による花崗岩が分布する地域となっており、周辺では花崗岩の転石が多くみられ、石割桜の石や三ツ石神社の伝説、東顕寺開基にまつわる斗米石などの奇岩・巨石が存在していたことや、現在の岩手医科大学附属内丸メディカルセンター付近が石間と呼ばれていたことなど、古くから花崗岩が露出していた地区であったことがうかがえる。

史跡地内では、昭和60年（1985）、平成25年（2013）、平成27年（2015）に石垣修復工事等に伴う地質調査が行われ、ボーリング調査により深さ７～16mまでの範囲について、地層構成と地質、地下水位の有無を確認している。

地質調査は、三ノ丸北西部とその周辺、二ノ丸西部石垣下・本丸北東部・淡路丸南側石垣下（彦蔵北側）の３箇所で実施され、地盤は表層より砂質粘土又は礫混り砂及び礫混りシルト層、続いて一部で花崗岩の転石が見られる真砂土（花崗岩風化残積土）、花崗岩で構成されていることが確認された。なお、地下水位については確認されなかった。



第３図　指定地周辺の地質図

※本図は、㈱長谷地質調査事務所（1980）発行の「北上川流域地質図」をもとに再構成しており、正確な地質境界を示すものではない。また、すべての要素を網羅しているわけではない。

２　南部氏の歴史

南部氏は、清和源氏の流れをくむ甲斐源氏の一族であり、武田氏、小笠原氏などと同族であり、平安時代の末期に加賀美遠光の第３子光行が、甲斐国巨摩郡南部郷（山梨県南巨摩郡南部町）を領したことにより南部氏として発祥した。

加賀美遠光と南部光行は源頼朝に仕え、文治５年（1189）の奥州合戦に従軍し、軍功により奥州糠部に所領を得たとされるがその事実は確認されていない。

なお、糠部は現在の岩手県北部から青森県東部に至る広大な地域で、鎌倉時代には北条得宗家の所領となっていたところであった。

建武元年（1334)、陸奥国司北畠顕家は、南部帥行を糠部郡奉行として派遣した。帥行とその弟政長は、糠部の八戸を拠点に活動し、南北朝の動乱期には奥州における南朝方の要として重きをなした。南北朝合一から室町中期にかけて、帥行、政長の子孫である八戸の根城南部氏（後の遠野南部氏）は糠部の代表的領主であり続けた。

この頃の糠部には、一戸、三戸、七戸などにも南部氏の一族が存在し、ほかに浄法寺氏、九戸氏、久慈氏、四戸氏などの有力領主が存在していたが、戦国時代に入るとそれら南部氏一族の中から三戸南部氏が台頭し、南部晴政（はるまさ）のころまでには根城南部氏を凌ぐ勢力となった。

晴政は足利義晴（よしはる）（室町幕府第12代将軍）から晴の一字を賜ったほか、岩手郡にも積極的に進出するなど、三戸南部氏の勢力拡大を図っていた。その一方、九戸氏は戦国時代に九戸から二戸に進出し、岩手郡の領主や、志和郡の斯波（しば）氏と深いつながりを持つなど、糠部では三戸南部氏と並び立つ存在となっていた。

天正10年（1582)、三戸南部家の当主晴政と晴継が相次いで死去すると、一族の田子九郎信直が三戸南部家当主となった。しかし、九戸氏や久慈氏、櫛引氏、七戸氏などは、信直の相続について不満を持ち、以後、三戸の南部信直と対立を深めていった。

天正14年（1586）から同16年（1588）にかけ、南部信直は岩手郡から志和郡に侵攻し、鎌倉時代以来の志和郡領主斯波氏を滅ぼした。この間、天正15年（1587）には、加賀の前田利家を介して豊臣秀吉に臣下の礼をとり、天正18年（1590）には秀吉の小田原攻めに参陣し、南部七郡の領有を認められた。一方、津軽では大浦為信（おおうらためのぶ）が独立を図り、津軽、外ヶ浜、糠部の一部を占拠。為信の所領は、豊臣秀吉から認められることとなり、信直は津軽地方の領地を失うことになった。

天正19年（1591）九戸政実（まさざね）が南部信直に対し反乱を起こすと、秀吉の援軍を得て鎮圧し、失った津軽の代償として、稗貫・和賀郡にも領土を広げた。

天正20年（1592）６月、諸城破却令に基づく「南部大膳大夫分国之内諸城破却共書上之事」目録によると、領内の36ヶ城は破却し、存置した城館は居城の三戸城以下12城館とされた。このうち岩手郡に属するものとしては唯一「不来方　平城　福士彦三郎持分」が認められたとされている。この不来方平城が後の盛岡城となるのである。

信直はその後、居城として北上川流域の要衝に盛岡城の築城を図り、城下町の建設にも着手。慶長４年（1599）３月、ほぼ完成した盛岡城に入城したが、病気が悪化し同年10月５日54歳の生涯を終えた。

築城工事は、嫡子利直に引き継がれ、信直卒去に伴う中断の後、慶長８年（1603）から再び普請が行われた。しかし、冬季には作業ができず、度重なる水害にみまわれるなど遅々として工事

は進捗しなかったが、寛永10年（1633)、盛岡藩第３代藩主南部重直の治世に一応の完成をみることとなり、以来盛岡藩10万石の居城となった。

寛文４年（1664)、重直は跡継を定めないまま江戸で死去した。幕府は裁定として、２万石減封した上で盛岡８万石を弟の重信に与えて継がせ、同じく弟の直房に新規に２万石を与えて八戸藩を興す形で分割相続が行われ、盛岡藩は存続することとなった。

文化５年（1808）には、幕府によって領地加増を伴わない（収入の増加が全く伴わない）20万石への高直し（文化の高直り）が行われ藩の格式は高くなった。しかし、 蝦夷地（現在の北海道）警衛など、より多くの兵力準備と動員が義務付けられ、盛岡藩の財政は慢性的な赤字体質となり破綻寸前まで追い詰められた。藩財政の破綻はそのまま領民への重い負担へと変わり、度重なる凶作も追い討ちをかけ、多くの一揆として現れた。

慶応４年（1868）７月、盛岡藩は奥羽越列藩同盟を支持するため、同盟を脱退した秋田藩領内へ侵攻した。戦況は当初こそ盛岡藩側に優位であったが、佐賀藩を中心とした新政府軍の加勢のために敗戦を重ね、９月には終戦を決意し10月３日に降伏した。

明治元年（1868）12月、南部利恭は盛岡藩第16代藩主となり、盛岡から白石13万石への転封を命じられるが、翌年には70万両献金を条件に盛岡に復帰した。しかし、藩の財政状況はもはやどうにもならず、自ら版籍を奉還した諸藩のひとつとなった。

表４　歴代盛岡藩主一覧

藩主	南部氏代世	実名	職称別号	廉中	実父	誕生	家督	治国(年)	薨年	薨日	法号	薨所	墓所
1	26	信直（のぶなお）	大膳大夫 信徳大明神	彦三郎晴政長女	石川左衛門尉 高信長男	天文15年（1546）3月	天正10年（1582）1月	15	55	慶長4年（1599）10月5日	常住院殿光録大夫江山心会	三戸城	三戸 聖寿寺
2	27	利直（としなお）	信濃守	蒲生氏郷義妹	信直　長男	天正4年（1576）3月15日	慶長4年（1599）12月	35	57	寛永9年（1632）8月18日	南宗院殿	三戸城	東禅寺
3	28	重直（しげなお）	山城守	加藤式部大輔明成女のち離縁	利直　三男	慶長11年（1606）3月9日	寛永9年（1632）10月1日	32	59	寛文4年（1664）9月12日	即性院殿	江戸 桜田邸	聖寿寺
4	29	重信（しげのぶ）	大膳大夫 西卒・信行	玉山氏秀久女	利直　五男	元和2年（1616）5月15日	寛文4年（1664）12月6日	28	87	元禄15年（1702）6月18日	大源院殿	江戸 麻布邸	聖寿寺
5	30	行信（ゆきのぶ）	信濃守 南英・信真	毛利刑部少輔元知女清浄院	重信　三男	寛永19年（1642）8月17日	元禄5年（1692）6月27日	10	61	元禄15年（1702）10月11日	徳雲院殿	御新丸	聖寿寺
6	31	信恩（のぶおき）	備後守時修斎	毛利甲斐守綱元女真寿院	行信　五男	延宝6年（1678）9月22日	元禄15年（1702）11月27日	5	30	宝永4年（1707）12月8日	霊巌院殿	御新丸	東禅寺
7	32	利幹（としもと）	大膳亮 自適斎・楽養軒	蜂須賀飛騨守守氏女仙桂院	行信　十一男	元禄2年（1689）閏正月20日	宝永5年（1708）閏正月5日	18	37	享保10年（1725）6月4日	霊徳院殿	御新丸	聖寿寺
8	33	利視（としみ）	大膳大夫 徳洲・壺雲斎	榊原式部大輔政那女本性院	信恩　三男	宝永5年（1708）4月26日	享保10年（1725）7月21日	36	45	宝暦2年（1752）3月28日	天量院殿	御城奥	聖寿寺
9	34	利雄（としかつ）	大膳大夫 万里・鶴霑智江	松平加賀守吉徳女玉台院	利幹　長男	享保10年（1725）6月11日	宝暦2年（1752）5月25日	27	55	安永8年（1779）12月5日	養源院殿	御城奥	聖寿寺
10	35	利正（としまさ）	大膳大夫 玉集庵・沾蘭	南部彦九郎信起女観光院	利視　八男	宝暦2年（1752）3月9日	安永9年（1780）12月	5	33	天明4年（1784）5月5日	義徳院殿	江戸 桜田邸	東禅寺
11	36	利敬（としたか）	大膳大夫	松平安藝守重晟女光樹院	利正　二男	天明2年（1782）9月29日	天明4年（1784）7月17日	37	39	文政3年（1820）6月15日	神鼎院殿	御城奥	聖寿寺
12	利用（先）（としもち）		駒五郎・吉次郎	—	三戸主計信丞子	文化4年（1807）12月19日	文政13年（1820）11月	1	15	文政4年（1821）8月21日	常孝院殿	江戸	聖寿寺
	利用（後）		大膳大夫 華陽・字厚	松平加賀守斎広卿女のち離縁	三戸左近信丞	享和3年（1803）11月6日	文政4年（1821）10月	4	23	文政8年（1825）7月18日	養徳院殿	江戸 桜田邸	東禅寺
13	38	利済（としただ）	信濃守 堂子彦 静勝軒・舞鶴亭	松平右京大夫輝延女利敬養女のち利用養妹雅姫君	利謹　長男	寛政9年（1797）8月29日	文政8年（1825）9月23日	23	59	安政2年（1855）4月14日	霊承院殿	江戸 麻布邸	聖寿寺
14	39	利義（としとも）	甲斐守 松堂楽堂	井伊掃部頭真亮養女実利用女法雲院	利済　長男	文政6年（1823）12月12日	嘉永元年（1848）6月27日	1	66	明治21年（1888）8月21日	—	盛岡	東禅寺
15	40	利剛（としひさ）	美濃守 中和・致道 節斎・万春堂	水戸中納言慶篤卿妹松姫君	利済　三男	文政9年（1826）12月28日	嘉永2年（1849）10月25日	20	71	明治29年（1896）11月2日	—	東京富士見邸	東京護国寺
16	41	利恭（としゆき）	甲斐守納斎	候爵浅野悉照女	利剛　長男	安政2年（1855）10月9日	明治元年（1868）12月17日	2	49	明治36年（1903）10月19日	—	東京富士見邸	東京護国寺

表５　盛岡城関連年表

変遷区分	年号	西暦	藩主	記　　事	出典等
	文治５	1189		奥州合戦、源頼朝が平泉藤原氏を滅ぼす。工藤行光岩手郡地頭となる	①
	元弘３	1333		鎌倉幕府滅ぶ	
	建武元	1334		北畠顕家陸奥国司となる、南部師行糠部に入る	
不来方城１期	元中９ （明徳３）	1392		南北朝合一 南部薩摩守政光、八戸の根城に入る	②
	応永11	1404		南部大膳（義政）、福士親行・秀行に不来方を任せる	③
	永享７	1435		和賀・稗貫の大乱、南部遠州等北奥勢が不来方より出陣　（翌年まで）	④
不来方城２期	天文８	1539		南部晴政、足利義晴より「晴」の一字を拝領。聖壽寺館大火	⑤⑥
	天正10	1582		田子信直、三戸南部を継ぐ	⑦ほか
	天正16	1588		南部信直、斯波氏を滅ぼす	
	天正18	1590		信直、前田利家軍に属し、小田原に参陣 豊臣秀吉、信直に本領安堵の朱印状を交付	⑦⑧
	天正19	1591	信直	九戸合戦、浅野長政らから「不来方」の地へ築城の勧奨を得る	⑥⑨
	天正20 （文禄元）	1592		南部信直、肥前名護屋に出陣 南部氏領内の城割、不来方ほか12城を存置し、厨川・乙部ほか破却	⑩
	文禄２	1593		福士氏、鵜飼（滝沢市）に移転	③
盛岡城１期	慶長２	1597		３月６日、南部利直を総奉行に築城開始（鋤初）	⑥
	慶長３	1598		３月、南部信直が、豊臣秀吉の京都醍醐の観桜会に参加	⑪
	慶長４	1599		築城ほぼ成り、信直入城	
				10月５日、信直、福岡城にて死去	
	慶長４	1599	利直	12月、利直、家督相続	
	慶長５	1600		関ヶ原の合戦 南部利直、徳川家康の命により、最上で上杉勢と対陣	
				盛岡城普請一応の完成	
	慶長８	1603		盛岡城修理	
	慶長13	1608		城下町並の整備一応成る	
	慶長14	1609		10月中津川に上ノ橋をかけ、青銅擬宝珠20個を取り付ける 造営大奉行七戸隼人正直時	⑫
	慶長16	1611		中津川に中ノ橋をかけ、青銅擬宝珠20個を取り付ける 普請奉行田代治兵衛	
	慶長17	1612		９月中津川に下ノ橋をかける 普請奉行波岡八左衛門	
	元和元	1615		大坂夏の陣、豊臣家滅ぶ 利直、徳川家よりカンボジア産の虎を拝領	
				６月盛岡侍屋敷町割始まる	
				利直、紫波の郡山城に移る	
盛岡城２期	元和３	1617		野田掃部を森ヶ岡城代として大修築（２期工事開始）	⑬⑭
				諸士町整備成る	
				三戸より庶民を盛岡に移し、三戸町とする	
	元和５	1619		盛岡城修築成り、南部利直が福岡城より移る	⑭
	寛永元	1624		処刑した切支丹を城内の虎の檻に入れる	⑮ほか
	寛永３	1626		利直、紫波の郡山城を居城とする	
	寛永４	1627		新御蔵を城内から内丸に引移す	
	寛永９	1632		８月18日、利直死去	
	寛永９	1632	重直	10月、重直、家督相続	
	寛永10	1633		南部重直盛岡城に入城 以後、藩主居城となる	
	寛永11	1634		この年、盛岡城炎上（寛永10、13年の説あり）	
	寛永13	1636		夏、本丸仮普請中に落雷し炎上する（寛永10年、11年の説あり） 福岡城の古材で外曲輪に御新丸を普請し、仮御殿とする	⑯
				盛岡城再造営	

変遷区分	年号	西暦	藩主	記　　事	出典等
盛岡城２期	寛永18	1641	重直	御新丸普請出来	
	慶安元	1648		７月21日、時鐘こわれる	
				９月25日、時鐘出来上がる	
	承応２	1653		閏６月29日、城内八幡神社を築立したところ烏帽子岩出る	
	明暦２	1656		夕顔瀬橋架設	
	万治２	1659		本丸三重櫓鯱鋳造のため、京都の釜師小泉仁佐衛門を召抱える	
				広小路できる	
	寛文２	1662		９月盛岡近在大洪水で中津川３橋落ちる	
	寛文３	1663		中ノ丸、太鼓堂もともに焼亡	
	寛文４	1664		９月12日、重直死去	
	寛文４	1664	重信	12月６日、重信、家督相続	
	寛文５	1665		３月１日、山口三右衛門を瓦焼奉行に仰付	
				郡山城をこわす	
				３月26日、御新丸の居間前の石垣構築	⑰
	寛文７	1667		６月６日、三ノ丸冠木門石垣、二ノ丸石垣の普請が許可される	⑱
				８月15日、城普請入用の石垣石材を志和郡長岡より船で召上げる	⑰
				11月15日、この年の石垣普請を終了する	
盛岡城３期	寛文８	1668		１月21日、石垣普請着工（再開）	⑰
				６月14日、石垣普請完成	
				４月26日、御本丸普請成就	
				６月14日、御成石垣普請なる	
				６月26日、御田屋清水御堀の橋普請出来る	
	寛文９	1669		７月５日、鳩御門の建直し及び外石垣普請実施	⑰⑲
				11月５日、重信が建直しの完了した鳩御門を通る	
	寛文10	1670		６月３日、大洪水中津川３橋及び夕顔瀬橋流失	
	寛文12	1672		淡路丸御蔵普請	
	寛文13（延宝元）	1673		５月21日、舟入場の石垣修復、先年の本丸三重矢倉１箇所、二重矢倉箇所焼失に伴う再建許可	⑳
				北上古川舟付木戸新規に建立	
				７月１日、北上川新川の開削普請始まる	
	延宝２	1674		３月21日、盛岡城三階櫓工事着手 奉行、野田弥右エ門・松尾安左エ門	
				４月20日、本丸三重櫓、二階櫓再建にあたり、「瀬戸瓦」を発注	⑰
				４月、中津川三橋普請出来る	
				中津川北上川新土手できる	
				７月17日、本丸二階櫓工事着手	
				８月28日、新山橋できる	
	延宝３	1675		本丸二階櫓再建、北上川の開削工事完成	⑲
	延宝４	1676		６月29日、本丸三階櫓棟上	
				９月１日、城廻りの堀端に桜垣建直し仰付	
	延宝５	1677		10月17日、中津川普請出来る	
	延宝６	1678		御勘定場新築（二ノ丸）	
				10月15日、郡山御殿取毀の材木にて盛岡城内御末方普請	
	延宝７	1679		三戸土手裏に時鐘を設ける 城内の時太鼓停止	
				７月10日、二ノ丸西方の土手長さ 100間余、新規に石垣を築くこと、淡路丸、三ノ丸に二階蔵を建てること、三ノ丸石垣の修復等が許可される	⑰
				11月24日、石垣破損修す	⑰

変遷区分	年号	西暦	藩主	記　　事	出典等
盛岡城３期	延宝８	1680	重信	２月１日、石垣石材を外曲輪（現在の内丸）石間、八戸屋敷、斗米（とっこべ）石を（中ノ橋通）から切り出す	⑰
				３月８日、本丸石垣築仰出	
				５月８日、徳川家綱死去により普請中断	
				９月４日、二階蔵三箇所建替え及び石垣補修完成	
				10月21日、再び城内石垣普請方幕府より許可	⑰
	延宝９	1681		２月９日、本丸石垣築懸	
	天和元	1681		６月27日、斗米鐘楼十三日町裏へ移す	
	天和２	1682		２月29日、普請中の本丸二階下、吹上門北側の石垣20間余が崩れる	⑰
				４月29日、同上石垣普請許可	
				上ノ橋の架け替え	
				８月25日、本丸西側の石垣補修仰付	⑰
				８月29日、本丸石垣の修理着手	
				11月22日、二ノ丸北側の石垣修理完了	
	天和３	1683		６月22日、新山舟渡土橋被仰渡	
	貞享２	1685		大手より東方川端の土手崩れる	
	貞享３	1686		３月、二ノ丸西側の石垣完成（７年間かかる） 石垣奉行　奥寺八左衛門・野田弥右衛門	二ノ丸西面
				８月12日、大手門筋土手崩れの築直し幕府より許可	
	元禄３	1690		８月９日、新山土橋渡初め	
	元禄４	1691		７月24日、三ノ丸側惣堀繕う	
	元禄５	1692	行信	７月27日、行信、家督相続	
	元禄13	1700		城内の焔硝蔵を愛宕山に移す	
	元禄15	1702		６月18日、重信死去	
				10月11日、行信死去	
	元禄15	1702	信恩	11月27日、信恩、家督相続	
	元禄16	1703		幕府に対し、本丸・二ノ丸・三ノ丸等の石垣11箇所の補修を願い出る	⑰
				９月29日、普請願が許可される	
	元禄17	1704		１月２日、大地震により本丸の壁と石垣が崩れ、破損したため、 藩主・諸役人共々御新丸に移る	
				４月５日、孕んでいる箇所の石垣普請を野田弥右衛門・川守田弥五兵衛に指示	⑲
盛岡城４期	宝永元	1704		４月21日、鶴姫死去により石垣普請取り止め	⑲
				７月25日、石垣根石設置をするよう指示	⑰
				12月10日、石垣普請完了	
	宝永２	1705		３月13日、石垣修理を雪が消えるまでの間休止とする	⑰⑲
				５月１日、二階櫓・車門・石垣修復について、幕府に願い出る	
				三ノ丸瓦門北石垣修復	⑰⑲
				７月１日、幕府に対し、二階櫓・鳩御門ほか修理願い出る	
				９月２日、三ノ丸北側石垣修復工事完成	㉑
				11月22日、車門の石垣修理一部完成 残りは来春に着工するよう指示	⑰⑲
	宝永３	1706		３月３日、本丸石垣の修繕のため、御廊下、御二階取り壊し	
				３月22日、廊下橋・三ノ丸たたみ立て直し指示	
				８月12日、幕府に対し、絵図を持って石垣普請の説明を行う	
	宝永４	1707		２月12日、本町裏の堀の中にある石を石垣に使用するよう指示	
				２月19日、石垣及び御二階普請に着手	⑲
				３月、本丸二階櫓石垣修復の石材を、本町裏の堀から採取	⑰⑲
				３月19日、石垣並びに二階櫓の普請取り付け	
				９月13日、城内の柵建直しの普請を仰付けたが、当年不作のため、石垣普請を停止	
				12月８日、信恩死去	

変遷区分	年号	西暦	藩主	記　　事	出典等
盛岡城４期	宝永５	1708	利幹	閏正月５日、利幹、家督相続	
				１月24日、大風、北御櫓鯱吹き落ちて所々損す	
	宝永６	1709		御新丸に能舞台造立	
				７月４日、三階櫓鯱棟上	
	享保元	1716		内丸屋敷萱葺の処柾葺被仰出	
	享保４	1719		１月10日、本丸御末より出火	
				１月12日、馬屋普請出来	
	享保10	1725		６月４日、利幹死去	
	享保10	1725	利視	７月21日、利視、家督相続	
	享保15	1730		榊山曲輪に榊山正一位稲荷大明神を崇め、藩内の総鎮守とする	
	享保18	1733		11月10日、御城内（三ノ丸）太鼓堂に太鼓を釣り上げ、 寛文以降停止のものを再建	
	元文２	1737		10月16日、紙丁橋普請出来	
	元文５	1740		１月11日、幕府に対し石垣修復を申し出る	⑰
				本丸西北石垣・二ノ丸乾之方石垣修補許可される	⑰
				３月20日、城内石垣普請奉行御者頭石川助左衛門を仰付ける	
				淡路丸石垣にハバキ石垣を取り付け、崩落を防ぐ 石材は日蔭山より採取（二ノ丸東側を含めて延享年間まで施工）	⑲
				６月15日、石垣普請を仰付	⑰
				７月23日、新御蔵完成	
				本丸三階櫓の瓦葺修理の普請に取り掛かる	
				９月１日、御中丸から大沢川原方の石垣修理着手	⑰
	寛保２	1742		９月19日、中ノ橋架け替え出来渡り初め	
				11月21日、淡路丸の石垣普請で使用する石材を雪のあるうちに運搬しておくよう指示	⑰
	寛保３	1743		本丸御三階修復、６月29日に完成	
	寛保４	1744		淡路丸南面石垣補修工事中断	
	延享元	1744		２月10日、石合御蔵完成	
				５月、本御蔵普請	
				この年、惣御門惣柵建替	
	延享４	1747		12月18日、淡路丸南面の石垣補修、ハバキ石垣設置完了	⑰
	寛延２	1749		７月５日、彦蔵が完成する	
				９月22日、城内淡路丸に信直の神位を勧請・淡路大明神造立	
	宝暦２	1752		３月28日、利視死去	
	宝暦２	1752	利雄	５月22日、利雄、家督相続	
	宝暦３	1753		６月18日、御本丸百足橋下菜園入口の柳木に落雷す	
				９月５日、城内に雷堂を造立鎮座	
	宝暦12	1762		７月19日、綱門修復仰付	
				中丸御門内の番所、大工小屋前門を建て、瓦葺とする	
				８月11日、下ノ橋普請出来る	
				９月、夕顔瀬橋の下流土手を新築	
	宝暦13	1763		８月22日、御鷹部屋前の塀側大腰掛新規普請	
	明和元	1764		５月16日、城内外の惣塀並びに木御繕普請	
				10月４日、城内淡路丸櫻山御宮修復	
	明和３	1766		10月29日、中丸玄関前から車御門まで切石普請	
				この年、下ノ橋御門新規建直し	
				11月10日、綱御門建替普請	
盛岡城５期	明和７	1770		７月７日、紙丁橋架け替え	
	明和８	1771		三階櫓を改修	
	安永元	1772		５月３日、地震により石垣孕み２箇所	
	安永２	1773		百足橋下に二間・三間の土蔵を造る	

変遷区分	年号	西暦	藩主	記　　事	出典等
盛岡城５期	安永６	1777	利雄	６月21日、綱御門脇から大納戸所後の柵を修理	
				９月、御新丸御門・塀・屋根大破につき修理	
	安永７	1778		４月22日、城内石垣の普請修補許可	
	安永８	1779		７月22日、城内石垣所々孕み出て、その修理許可となる	
				10月、中ノ橋架け替え。下ノ橋普請	
				12月５日、利雄死去	
	安永９	1780	利正	２月７日、利正、家督相続	
	天明２	1782		３月、御新丸建物の塀を修理	
				６月20日、上ノ橋新規架け替え	
	天明３	1783		盛岡城下仁王厩を城内の桜馬場に移す	
	天明４	1784		５月５日、利正死去	
	天明４	1784	利敬	７月17日、利敬、家督相続	
	天明５	1785		８月24日、大雨風のため綱御門倒壊	
	天明６	1786		御勘定所を建て替え	
	天明７	1787		９月、御新丸普請成就	
	天明８	1788		10月29日、綱御門普請出来て上棟する	
	寛政６	1794		５月15日、勘定所新規建替	
				６月16日、中ノ橋普請（10月17日出来）	
	寛政７	1795		明神曲輪の石垣普請ができる	
	寛政11	1799		５月14日、下ノ橋普請	
				７月６日、車門屋根瓦損じ普請	
				三階並びに石垣普請	
	寛政12	1800		３月６日、二ノ丸諸役所の住居替仰出 御目付所前に土蔵建て「御留蔵」とする	
				10月、大手先の外堀二箇所埋まり、復旧を老中より許可される	㉒
				10月15日、城外の外塀修補	
	享和２	1802		御新丸新規に普請できる	
	享和４	1804		８月12日、上ノ橋架け替え完成	
	文化５	1808		２月25日、御末御門のことを御本丸御門と改称する	
	文化７	1810		９月29日、盛岡城本御蔵二番三番新規建替え	
	文化９	1812		淡路丸大明神を櫻山神社と改める 淡路丸に桜馬場を設ける	
	文化13	1816		６月、城内諸役所の名改める	
	文政２	1819		５月、城内榊山御本社棟上	
	文政３	1820		６月15日利敬死去	
	文政４	1821	利用	７月９日、鳩森曲輪土塀大雨で崩れる	
				８月21日利用（先）死去	
				10月、利用（後）、家督相続	
	文政６	1823		９月７日、暁御台所前御蔵一箇所焼失	
	文政８	1825		７月18日、利用（後）死去	
	文政８	1825	利済	９月23日、利済、家督相続	
	文政12	1829		５月、広小路屋敷普請始まる	
	文政13	1830		広小路御殿を新たに造営 御菜園も造営し、泉水庭園に曲水の茶屋、万歳橋などを建てる 稲荷堂・雷神社も再建 八幡社を建てて、三武社と号する	
	天保元	1830		５月、中ノ橋架け替え	
				９月27日、広小路御殿棟上	
	天保５	1834		10月20日、本丸庭に式舞台普請仰出	
	天保７	1836		11月１日、寅刻城内御小納戸預かりの彦蔵焼失	
	天保13	1842		３月20日、本丸「御三階」を「御天守」と唱えることとする。	㉓
				４月24日、下御殿を以後清水御殿と唱えるよう仰出	

変遷区分	年号	西暦	藩主	記　　事	出典等
盛岡城５期	天保14	1843	利済	８月30日、清水御殿の大工小屋焼失	
	弘化元	1844		５月３日、外三御門に見張番所建つ	
				11月、城内毘沙門渕朝日渓に湧泉あり御茶水とする	
				11月４日、城内鳩森曲輪鹿島篭堂焼失	
	弘化２	1845		３月24日、城内上り口普請仰出	
	弘化３	1846		６月20日、車御門普請完成	
	弘化４	1847		本丸の表居間を改築 本丸中庭に舞台が設けられる	
	嘉永元	1848	利義	６月27日、利義、家督相続	
	嘉永２	1849	利剛	10月25日、利剛、家督相続	
	嘉永３	1850		中ノ橋普請	
	嘉永４	1851		御菜園の普請すべて成就	
	嘉永５	1852		三ノ丸鳩森下石垣普請	
	安政元	1854		本丸御殿の不要な部分を整理し始める 鳩森下曲輪石垣の修復が行われる 聖長楼三階・孔雀之間・海老之間・中二階廊下・杜若之間・蔦之間・車寄などを取り壊す	
	安政２	1855		冠木御門番所の脇並びに大手門脇の石垣普請	
				４月14日、利済死去	
	文久２	1862		本丸天守の普請できる	
	明治元	1868		９月25日、戊辰戦争で盛岡藩降伏する	
	明治元	1868	利恭	12月17日、利恭、家督相続	
	明治２	1869		７月、盛岡藩庁を城内に置く	
				10月15日、城内惣神社他所に移す	
	明治３	1870		７月、廃藩置県により盛岡県となる	
				８月、盛岡県庁を城内に置く	
	明治４	1871		県庁を仁王村広小路の藩主別邸に移す	
	明治５	1872		城域が陸軍省の所管となる	
	明治７	1874		城内建物を入札により払い下げ、取り壊し	

※出典等一覧

①『吾妻鏡』
②『八戸家伝記』
③「福士系図」
④『稗貫状』
⑤『大館日記』
⑥『祐清私記』
⑦『南部根源記』
⑧「豊臣秀吉朱印状」
⑨『旧記』
⑩「南部諸城破却書上」
⑪「信直書状」
⑫「青銅擬宝珠銘」
⑬『藩史草稿』
⑭『郷村古実見聞記』
⑮「バジェスの582章」
⑯「盛岡城図（金沢）御新丸図」
⑰『御城廻御修補』
⑱『老中奉書返書』
⑲盛岡藩家老席日記『雑書』
⑳『幕府老中奉書』
㉑「石垣普請奉行刻銘」
㉒「盛岡城大手先御堀浚御願」
㉓ 盛岡藩家老席日記『覚書』

３　盛岡城の基本構造

（１）城郭の構造

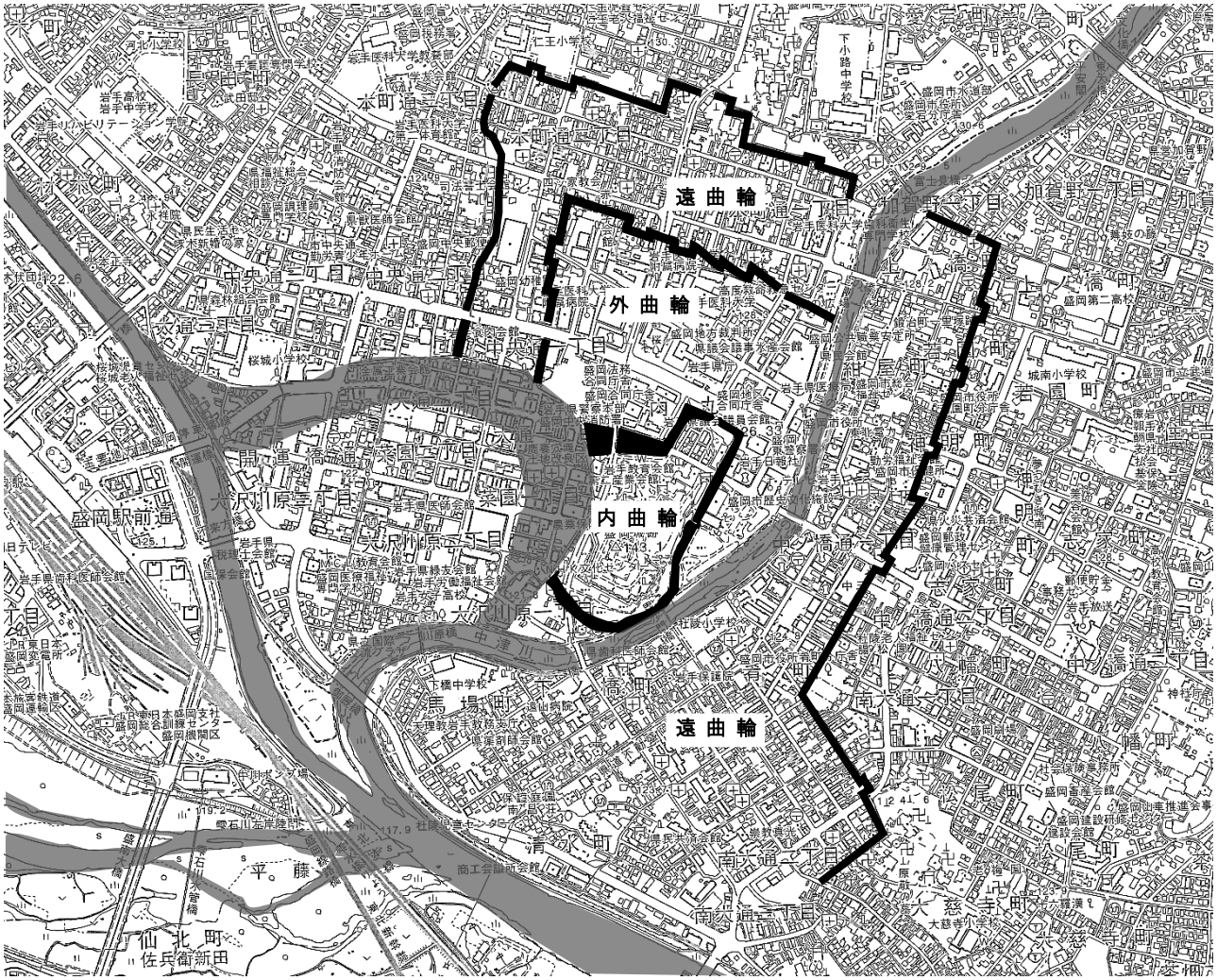
盛岡城の基本構造は、内曲輪（御城内）を旧北上川と中津川の合流点に突出した小丘陵に配置し、内曲輪の全体に水堀と河川を巡らせ、南部氏一族や盛岡藩の重臣たちの屋敷が存在した外曲輪を設けるとともに、さらに外側に一条の塁濠を巡らせ、外曲輪を囲むように東側の中津川対岸を含んだ地域に遠曲輪（総構え）が配置される内曲輪を要とする梯郭式の縄張りとなっている。

なお、遠曲輪の内外は町人や諸氏の屋敷地となっており、曲輪の縁辺には惣門が設けられていた。また、城下から諸街道への出口には枡形が設けられ、その内側には組丁と呼ばれる足軽（同心）の屋敷地が配置され、城下町へ出入りを管理していた。

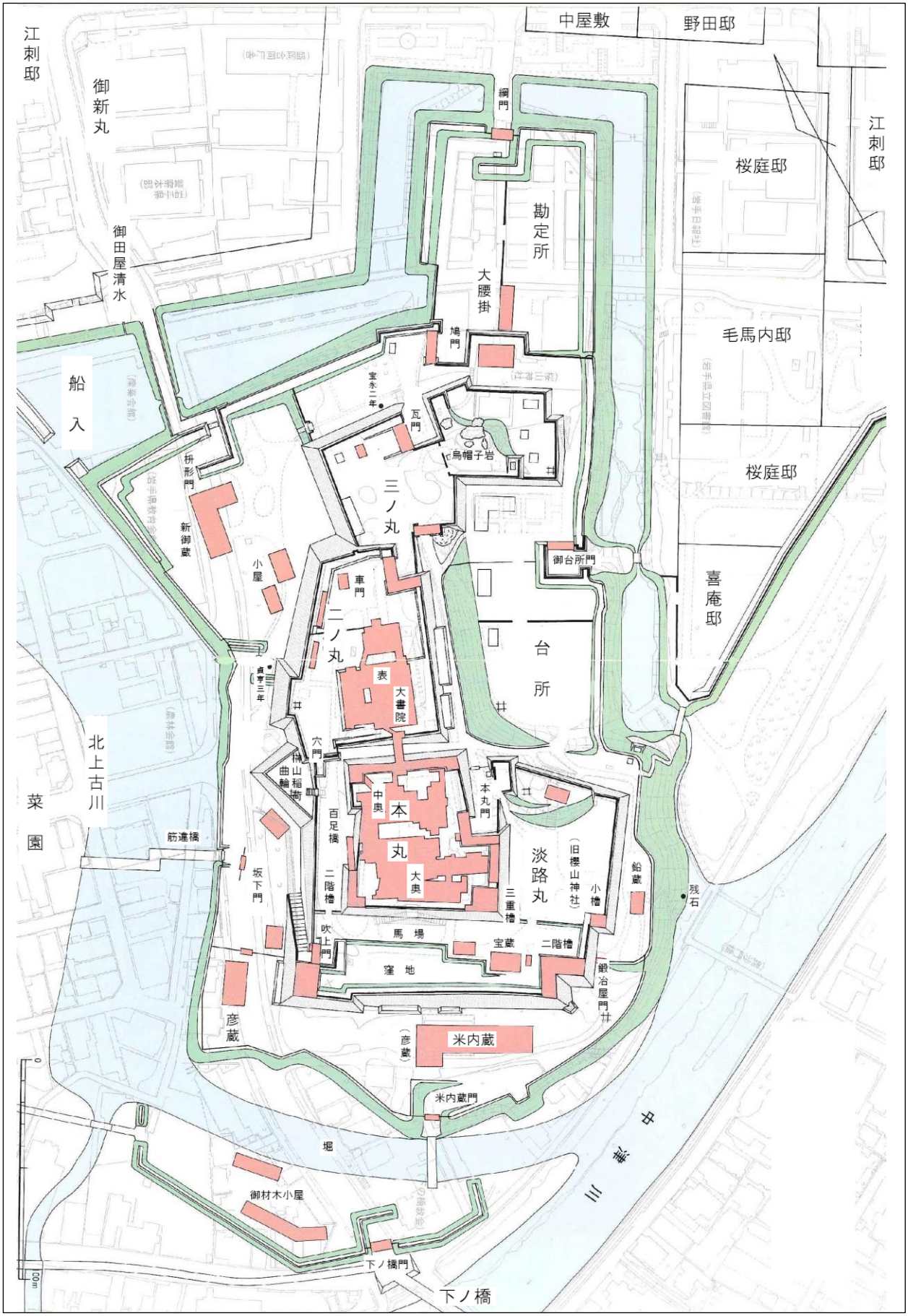
内曲輪に関しては、本丸・二ノ丸・三ノ丸・淡路丸・榊山稲荷曲輪から構成され、丘陵南側の頂部に配置された本丸から、二ノ丸・三ノ丸と段下がりに連なる連郭式の縄張りとなっている。

これまでに行われた発掘調査の結果、内曲輪の本丸・二ノ丸・淡路丸において、中世から近世までの遺構面が確認されており、福士氏の不来方城から、南部氏の盛岡城とその終末までの大まかな変遷が判明している。

なお、盛岡城以前の城館については「不来方城」の固有名詞は存在しないが便宜上用いている。



第４図　盛岡城の縄張り



第５図　城内（内曲輪）の建物配置復元図（江戸時代後期）

※盛岡市・盛岡市教育委員会「盛岡城」（1998）を編集

（２）遺構の変遷（25頁第６図）

不来方城期（14世紀末～16世紀）

室町時代（14世紀末～15世紀）から戦国時代（16世紀）にかけて、福士氏の居城（日戸館・淡路館）が存在した時期である。

曲輪は、丘陵の頂部から裾に至る自然地形に合わせた形で縄張りされており、後の盛岡城の本丸を主郭とし、二ノ丸・三ノ丸の前身となる曲輪が丘陵頂部に連なり、それぞれが堀切で区画されていた。また、淡路丸は狭長な曲輪が雛段状に造成され、主郭を囲んでいた。

不来方城１期は丘陵の上部中心に曲輪が構築され、２ａ～２ｂ期に規模を拡大、丘陵裾部まで堀や土塁が構えられていた。

盛岡城１期（16世紀末～17世紀前葉）

南部氏により築城が行われた慶長年間（16世紀末～17世紀初頭）に相当し、本丸と二ノ丸の西面を除く範囲と主要な城門のある虎口にのみ石垣が構築され、石垣様式は野面石を多用した乱積（乱積Ａ）である。

淡路丸については大規模な盛土造成が行われ、曲輪を広く大きなものにまとめている。曲輪の縁辺には木柵を巡らせ、屈曲した横矢掛けの構造をとっており、地形に合わせた縄張りの中にも、近世的な築城意識が読み取れる。

盛岡城２期（17世紀前葉～17世紀後葉）

元和３年（1617）に行われた大改修に伴うもので、本丸においては規模が拡張され、二ノ丸では石垣の修復が行われ、三ノ丸と淡路丸に石垣が構築されるなど、内曲輪の総石垣を志向した整備がすすめられ、近世城郭として一応の完成を見た時期といえる。

石垣様式は不定形な割石が使用された乱積（乱積Ｂ）である。

盛岡城３期（17世紀後葉～18世紀前葉）

寛文８年（1668）から延宝４年（1676）にかけ、三階（後の天守）櫓・二階櫓を含めた本丸再建が進められたほか、内曲輪西面に直面していた北上川の川筋が切り替えられた。

その後、延宝８年（1680）から貞享３年（1686）の７年間の歳月をかけ、淡路丸西面から二ノ丸西面までの石垣が構築され、内曲輪の総石垣化が完成した時期である。

なお、淡路丸西面から二ノ丸西面に構築された石垣は、控えの長い規格材を使用した布積（布積Ａ）である。

盛岡城４期（18世紀前葉～18世紀中葉）

宝永元年（1704）からの震災復旧から始まるもので、本丸西側・二ノ丸北東部・淡路丸西側の石垣が積み直されている。

また、元文５年（1740）から延享５年（1748）にかけ、淡路丸南側石垣や二ノ丸東石垣の孕み出しの応急処置として、補修石垣（ハバキ石垣）が構築された。

盛岡城５期（18世紀後葉～19世紀中葉）

18世紀後葉から明治７年（1874）の破却までの期間である。

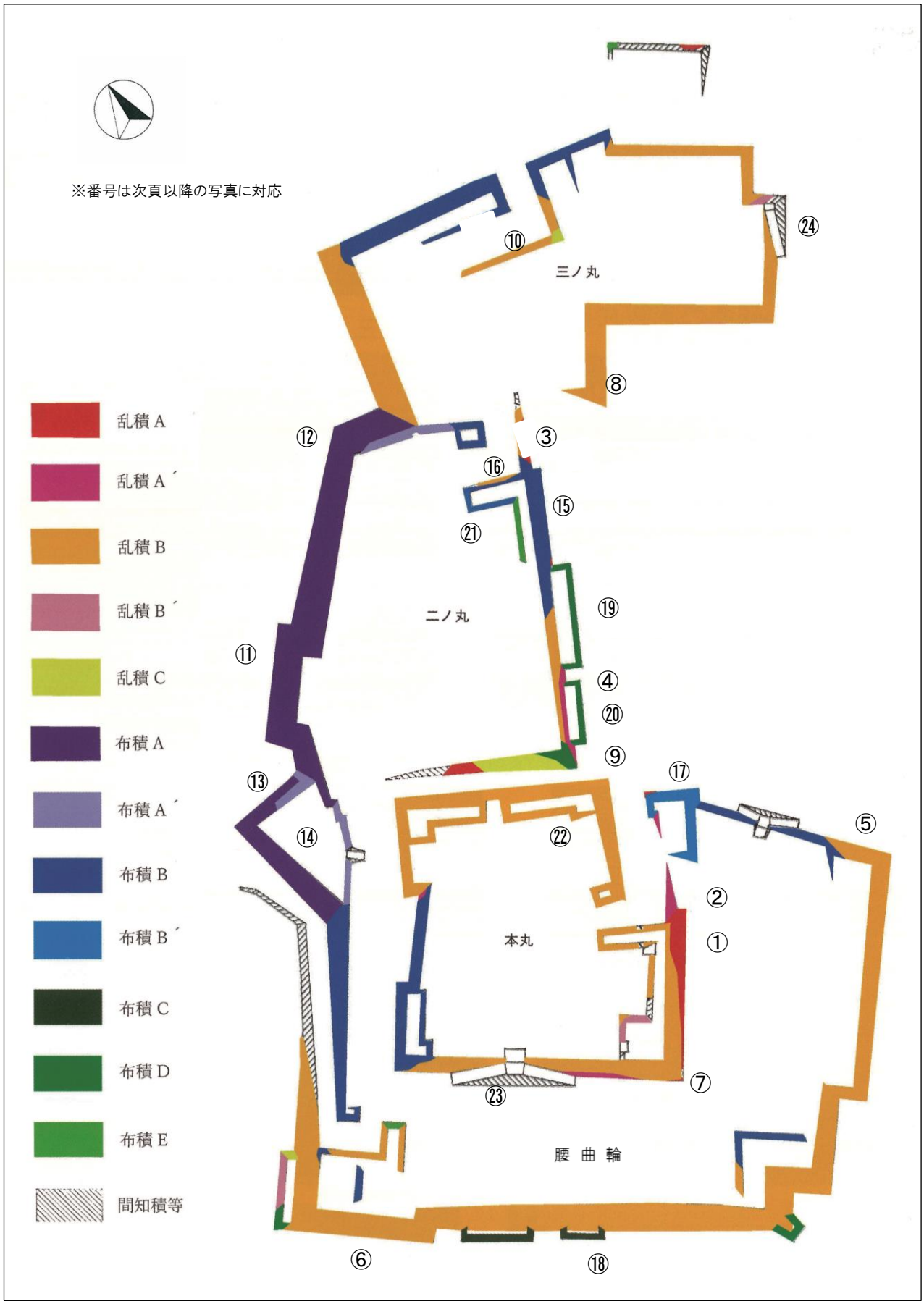
淡路丸の窪地は埋め立てられ、南西隅櫓が廃止されて吹上三社の神域となったほか、城内の排水施設が整備され、本丸御殿の一部（聖長楼）が本丸の西側に張り出すように構築されていた。

表６　遺構と石垣様式の変遷

時　期			年　代	概　　要
不来方城期	①	不来方城１期	14世紀末頃～	・丘陵の頂部から中腹にかけて城郭が築かれる。
	②	不来方城２ａ期	15世紀末 ～16世紀前半	・丘陵裾部まで拡大される。後の本丸・二ノ丸・三ノ丸・淡路丸の前身的曲輪が存在した。
		不来方城２ｂ期	16世紀後半	・本丸付近の堀改修 ・淡路丸の嵩上げ
盛岡城期	③	盛岡城１期	16世紀終末 （慶長２年：1597）～	・不来方城（福士氏の居館）を大改修。本丸、二ノ丸、城内主要虎口に石垣が築かれる（乱積Ａ）。石垣は、角石に割石、築石に野面石を用いた乱積。淡路丸の法面は土手のままで木柵が廻る。
	④	盛岡城２期	17世紀前葉 （元和３年：1617）～	・本丸、二ノ丸石垣の改修（本丸の拡張）。城の西側を除き、淡路丸・三ノ丸に石垣が構築（乱積Ｂ）される。 ・石垣は築石に至るまで割石で乱積。建物に双鶴（向鶴）紋の瓦が葺かれる。寛永13年（1636）本丸の大半を焼失
	⑤	盛岡城３期	17世紀後葉 （寛文８年：1668）～	・淡路丸西側・二ノ丸西側・榊山稲荷曲輪の石垣が構築される（布積Ａ）。本丸再建本丸と淡路丸などの主な櫓等に赤瓦が葺かれる。
	⑥	盛岡城４期	18世紀前葉～中葉 （宝永元年：1704）～	・本丸西側、二ノ丸北東部、淡路丸西側などの石垣積直し（布積Ａ´・Ｂ） ・淡路丸南と二ノ丸東にハバキ石垣構築（布積Ｃ・Ｄ、元文５：1737～） ・淡路丸窪地の縮小
	⑦	盛岡城５期	18世紀後葉 ～19世紀中葉 （～明治７年：1874）	・淡路丸窪地の埋立て ・淡路丸南西隅櫓を廃止して吹上三社勧請 ・城内排水設備の整備 ・明治７年建物払い下げ、取り壊し

第６図　盛岡城縄張りの変遷

※盛岡市遺跡の学び館第18回企画展　図録「不来方之城新築之有可候-南部氏の盛岡築城-」（2020）より転載



第７図　石垣の分類と範囲

※盛岡市遺跡の学び館第18回企画展　図録「不来方之城新築之有可候-南部氏の盛岡築城-」（2020）を編集

①乱積Ａ　本丸北東部御国産所下側

②乱積Ａ　本丸門南東出隅

③乱積Ａ　三ノ丸不明門西側

④乱積Ａ´　二ノ丸東面石垣

⑤乱積Ｂ　淡路丸北東隅

⑥乱積Ｂ　淡路丸南西部（修復後）

⑦乱積Ｂ　本丸天守台

⑧乱積Ｂ　三ノ丸不明門東石垣

写真　石垣の積み方（１）

⑨乱積Ｃ　二ノ丸南東部（隅部分）

⑩乱積Ｃ　三ノ丸瓦門南東部（入隅）

⑪布積Ａ　二ノ丸西側

⑫布積Ａ　二ノ丸北西部

⑬布積Ａ　榊山稲荷曲輪北面

⑭布積Ａ´　榊山稲荷曲輪東側

⑮布積Ｂ　二ノ丸北東隅

⑯布積Ｂ　二ノ丸車門

写真　石垣の積み方（２）

⑰布積Ｂ´　乗物部屋

⑱布積Ｃ　淡路丸ハバキ石垣（撤去前）

⑲布積Ｄ　二ノ丸東側ハバキ石垣

⑳布積Ｄ　二ノ丸東側ハバキ石垣

㉑布積Ｅ　二ノ丸北東部石土居

㉒布積Ｅ　本丸小納戸櫓台（修復前）

㉓間知積　本丸南側

㉔間知積　三ノ丸東側

写真　石垣の積み方（３）

（３）石垣石材及び瓦の産地と関連遺跡

ア　石垣石材の産地（30頁表７、32頁第８図）

盛岡周辺の北上川以東は古生代に形成された付加体である根田茂帯に属し、その中に前期白亜紀深成岩類である花崗岩の貫入が見られる。個々の貫入範囲は小規模で、数百m前後から数km程度である。盛岡城の立地する独立丘陵にも花崗岩風化土（マサ土）の中に大小の花崗岩転石があり、中津川河川敷にも花崗岩をみることができる。

盛岡城の石材は、内曲輪が構築されている丘陵から産出した石材も使用されており、城内には矢穴を開けながらも切り出されていない転石も残されている。しかし、城内全域の石垣として使用するには足る量ではなく、周辺域から切り出しを行っている。その産地を関連遺跡及び伝承地も含め表７及び第８図にまとめた。

石材は、石切丁場（いしきりちょうば）である程度加工し、規格材にしてから運ばれたものと考えられ、「御城廻御修補（おしろまわりおしゅうほ）」には「八木橋茂兵衛其外石切共相尋候処前々御普請之節面弐尺四方扣四尺ニ切立申由得共此度者五寸相増遂吟味候処石壱ツニ付六百三十文宛ニテ割出可申旨書付差出候間右之通申付・・・」と書かれている。運搬方法については、盛岡藩家老席日記「雑書」の寛保２年（1742）11月21日の条に、「只今雪之内御城内へ引入申度旨申出候付、伺之通被　仰付、御目付へ申渡之」とあり、日蔭山石切丁場から切り出された石材は、冬季間に橇で運搬されたことがうかがえる。また、紫波郡紫波町長岡からの運搬については、盛岡藩家老日記「雑書」の寛文７年（1667）８月15日の条に「盛岡城御城御普請入用之石、志和郡之内長岡より船ニて御賦候」とあり、北上川を船で遡上する方法で運搬されたようである。

石材の産地のうち、盛岡城外曲輪に相当する範囲については、盛岡藩家老席日記「雑書」の宝永３年（1706）８月30日の条に、「御在所御城御修覆(復)之儀、先達て御伺被成候付、即刻及奉書候、段々御修覆(復)被成候処、石不足付外側之堀ニ有之石御遣被成度之由、委細以絵図被仰聞致承知候・・・」とあり、宝永４年（1707）２月12日の条には「御城石垣御普請御用本町裏御堀之内之石為取申度旨、野田半左衛門申出候付、石引出侯通、本町御町之馬屋破為賦候様ニ・・・」との記事がみられる。この付近では、平成11年度に岩手医科大学の関連施設建設に伴う発掘調査が行われており、堀の底部から盛岡城３期の矢穴列が残る花崗岩が多く確認されている。

表７　石切丁場（伝承地）及び関連遺跡

名　称	所 在 地	城までの直線距離	時　期	産状ほか
日蔭山石切丁場（金勢遺跡）	東中野字金勢ほか	約2.2km	18世紀中頃	・転石が斜面に露出しており、一部の石には矢穴が見られる ・南側には近代以降の採掘坑あり
盛岡城跡（内曲輪）	内丸57-1ほか	城　内	16世紀末～17世紀	・毘沙門橋際等に矢穴のある残石が見られる
盛岡城外曲輪	中央通一丁目ほか	約400m	16世紀末～17世紀後葉	・発掘調査により堀底から矢穴のある石が確認されている
白　石	上米内字白石地内	約10km	～19世紀	・築城の際に石垣を採取したという伝承あり ・山の斜面に転石がみられる
長　岡	紫波郡紫波町長岡地内	約15km	17世紀	・長岡地区よりもさらに３～４km東側の山屋地区より石材を採取し、長岡より舟で石材を搬出 ・長岡八坂神社の北西と南東には、矢穴のある石が散見される
岩清水館跡	紫波郡矢巾町字岩清水地内	約14km	16世紀末～17世紀	・遺跡内にある大石に、矢穴列の見られるものあり ・供給先は不明

城内の転石（淡路丸下南東側））

城内の転石（三ノ丸東側内堀）

日蔭山の転石

日蔭山の転石（矢穴あり）

イ　瓦の産地（32頁第８図）

盛岡城で使用された瓦の生産関連遺跡として発掘調査が行われたのは、紫波郡紫波町二日町字川原毛所在の川原毛窯跡である。

この窯跡で生産された瓦については、本丸三階櫓屋根総替えに伴う赤瓦調達のため、瓦土の採取地として「陣ケ岡長岩寺之下通」を吟味したが、既にほとんど取り尽くしていたため、周辺の田畑から採取することになったとの記録がある（「御城廻御修補」寛保２年９月13日条）ことから、寛保年間以前に瓦生産が開始されていたことが文献資料で確認されている。

このほか、瓦の生産地としては、盛岡市本町通周辺（寺町窯跡）、仙北町下川原、東中野字見石などが伝えられているが、このうち本町通周辺において実施された発掘調査では、南部家の家紋である粒羽双鶴文・骨羽双鶴文・角羽双鶴文を施した燻瓦や赤瓦、窯道具や陶器の未製品等が出土したことから、盛岡藩の御用窯である寺町窯が付近に存在する可能性が示唆された。

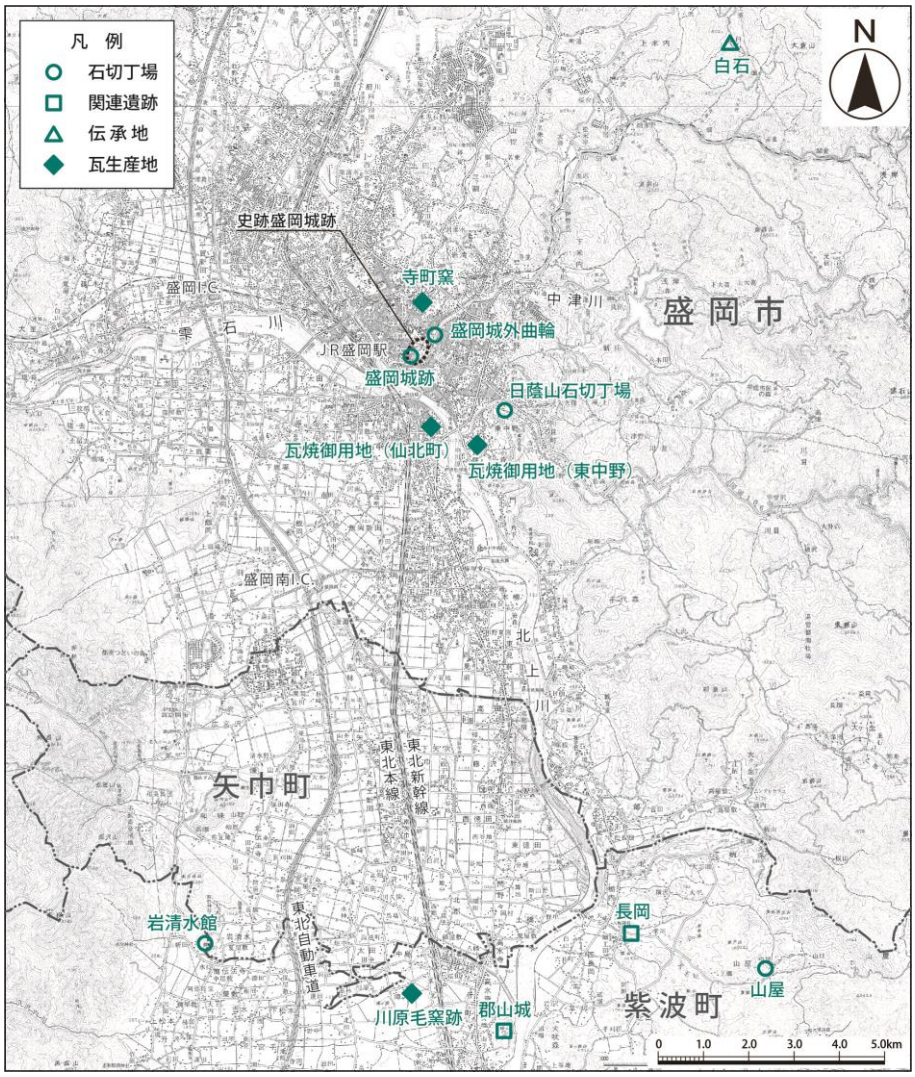
瓦焼御用地（「城下及近在図」　慶応年間）
もりおか歴史文化館　所蔵

寺町窯跡から出土した瓦等
（平成18年度調査）

なお、出土した瓦類については、17世紀末から19世紀中頃に生産されたものと考えられ、川原毛窯の閉鎖後に生産されたものと位置付けられるが、当該調査において窯跡本体が発見されていないことから、窯跡の特定には至っていない。

また、東中野字見石地内や仙北町下川原地内においては、今のところ瓦が生産された痕跡は発見されていないが、川井鶴亭の「盛岡城下古絵図」（鳥観図）には、仙北町下川原と寺町窯に相当する場所において煙が上る様子が描かれており、城下において瓦を生産した窯の存在を示したものとして注目される。

盛岡城下古絵図（もりおか歴史文化館　収蔵）に描かれた煙（左：仙北町周辺・右：寺町周辺）



第８図　石垣石材及び瓦の産地

（４）城下町の変遷（34～36頁第９～11図）

盛岡城下のまちづくりの基本は「互の字形」といわれている。第２代藩主南部利直が町づくりについて家臣に意見を求めたところ、重臣の北信愛が「一の字形は街道沿いの交通量の多い地に適し、盛岡のように往来の少ない地では、城を取り囲むように侍町を連ね、また見通しのききにくい五の字形にすべき」と答えたと伝えられている。

城下町の形成は慶長２年（1597）から始まる盛岡城築城を契機とするもので、慶長４年（1599）から本格的な城下町整備が進められ、現在の中心市街地の基礎が構築された。

城下町は既存の河川を利用し、内曲輪を北側に囲むように水堀と土塁を三重に巡らせ、内曲輪の外側には南部氏一族や盛岡藩の重臣たちの屋敷が存在した外曲輪を配し、大手・中ノ橋・日影の三門を設け出入りを管理した。

また、外曲輪を囲むように東側の中津川対岸を含んだ地域に遠曲輪（総構え）を配置。遠曲輪には各街道の出入口である仁王・四ツ家・寺町（花屋丁）・下小路・加賀野・八幡丁・新山（穀丁）に惣門を設けるとともに、その内側には組丁と呼ばれる足軽（同心）の屋敷地を配置し、出入りを管理していた。

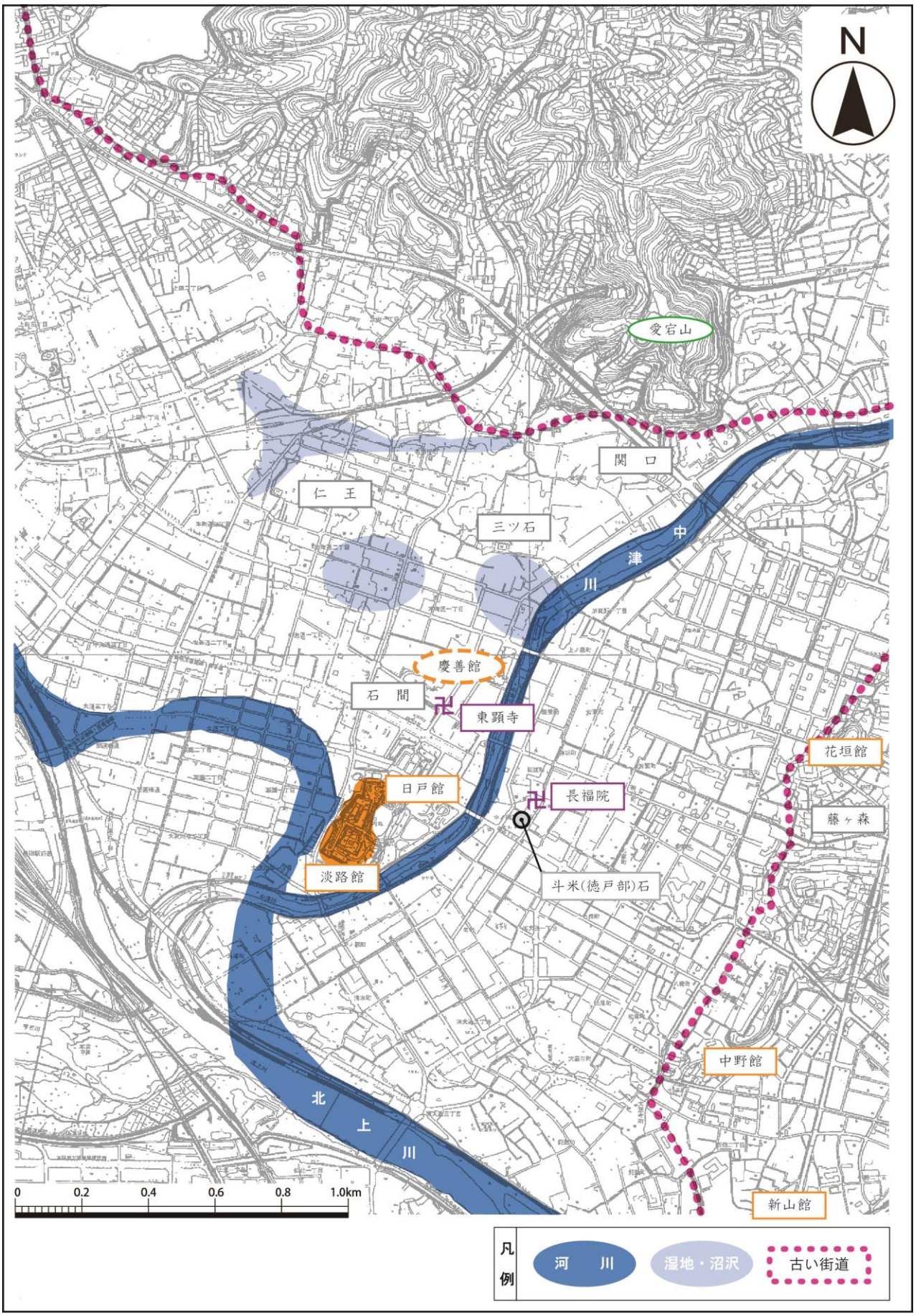
さらに南部氏ゆかりの寺院も領内から順次移されることとなり、三戸からは南部氏の墓所がある聖壽寺（臨済宗）、鬼門鎮護の祈祷寺として永福寺（真言宗）が移築されたほか、教浄寺（時宗）、報恩寺（曹洞宗）が、遠野からは東禅寺（臨済宗）が移されている。なお、これらの寺院は「盛岡五箇寺」といわれている。また、城下町の東側には南部家の氏神として尊崇されていた八幡宮などが配置された。さらに、他の地域から移転・招聘した寺院や神社等を遠曲輪北側の寺町惣門から北山にかけて各宗派の本寺を、また、城下の南口にあたる穀町惣門の内側に末寺を集中して配置した。

城下町には、重臣（高知）屋敷が配された内丸のほか、武家屋敷の侍丁・同心丁が設けられた。町家は、三戸丁・津軽丁・仙北丁など出身地にちなんだ町名、油丁・大工丁・鍛冶丁など職業にちなんだ町名、六日丁・八日丁の市日にちなんだ町名等がつけられた。さらに慶長14年（1609）には、中津川に上ノ橋が架けられたほか、中ノ橋が慶長16年（1611）、翌年の慶長17年（1612）には下ノ橋が相次いで架けられ、新しいまちづくりの基礎が固められている。

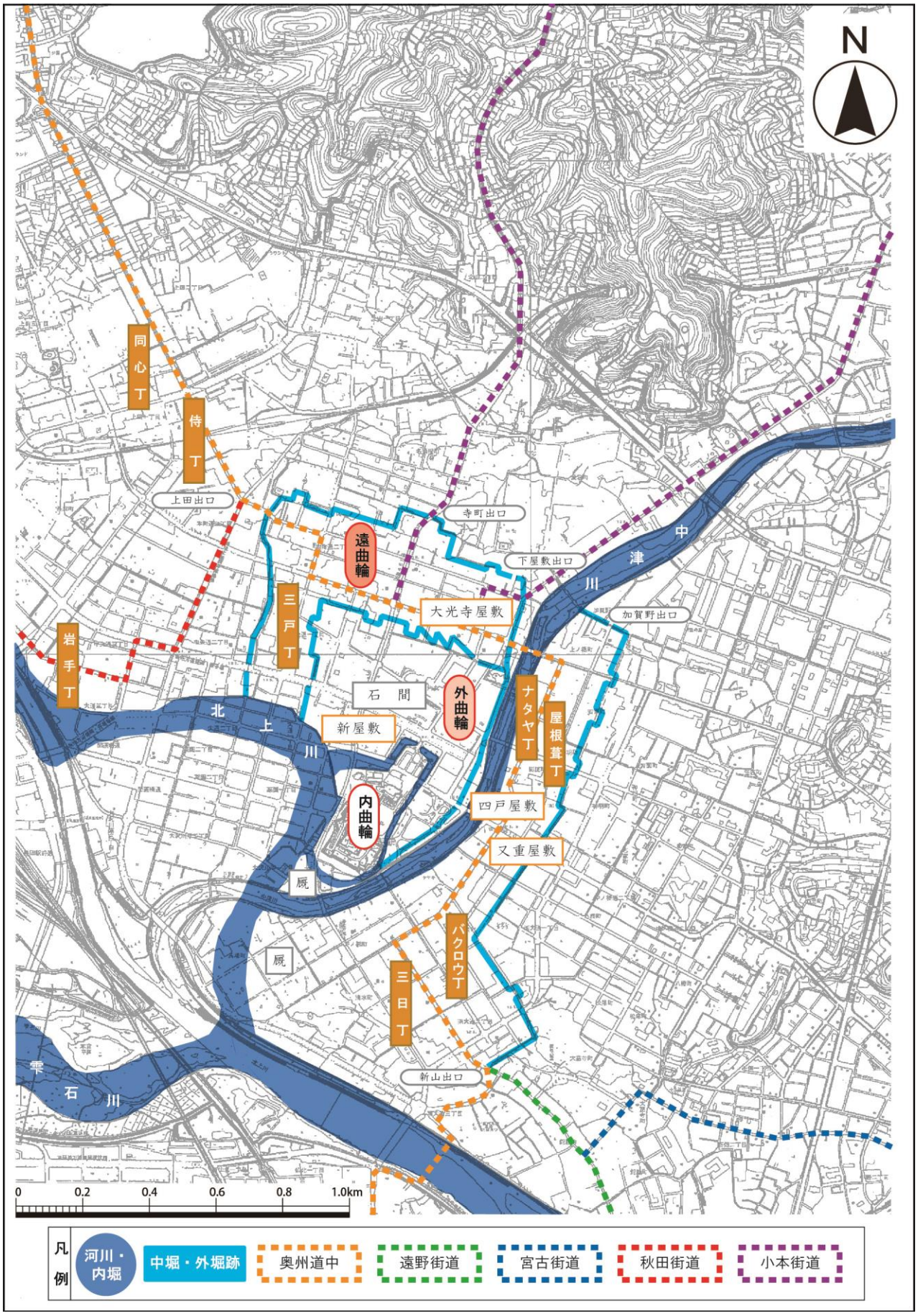
城下町の建設と並行して、度重なる洪水等のため難航していた築城工事も約40年間を費やして寛永10年（1633）に一応の完成をみることとなった。それに伴い南部氏は盛岡城を藩主の居城と定め、盛岡は名実ともに藩の中心都市としての城下町となった。

城下はその後も拡大を続け、江戸時代中期の延宝３年（1675）には北上川の流路が付け替えられたほか、明暦２年（1656）には北上川に夕顔瀬橋が架けられ、延宝８年（1680）には仙北丁と新山河岸を結ぶ新山舟橋が完成している。また、流路の変更に伴い、大沢川原や帷子丁・長丁などの新しい町が設けられたほか、夕顔瀬橋の架橋に伴って同心丁（新田町）が設けられたことにより、北上川の西側にも城下町が拡大するなど、17世紀末以降に描かれた絵図をみると、城下の整備・拡大は概ねこの時期に完成しているようである。

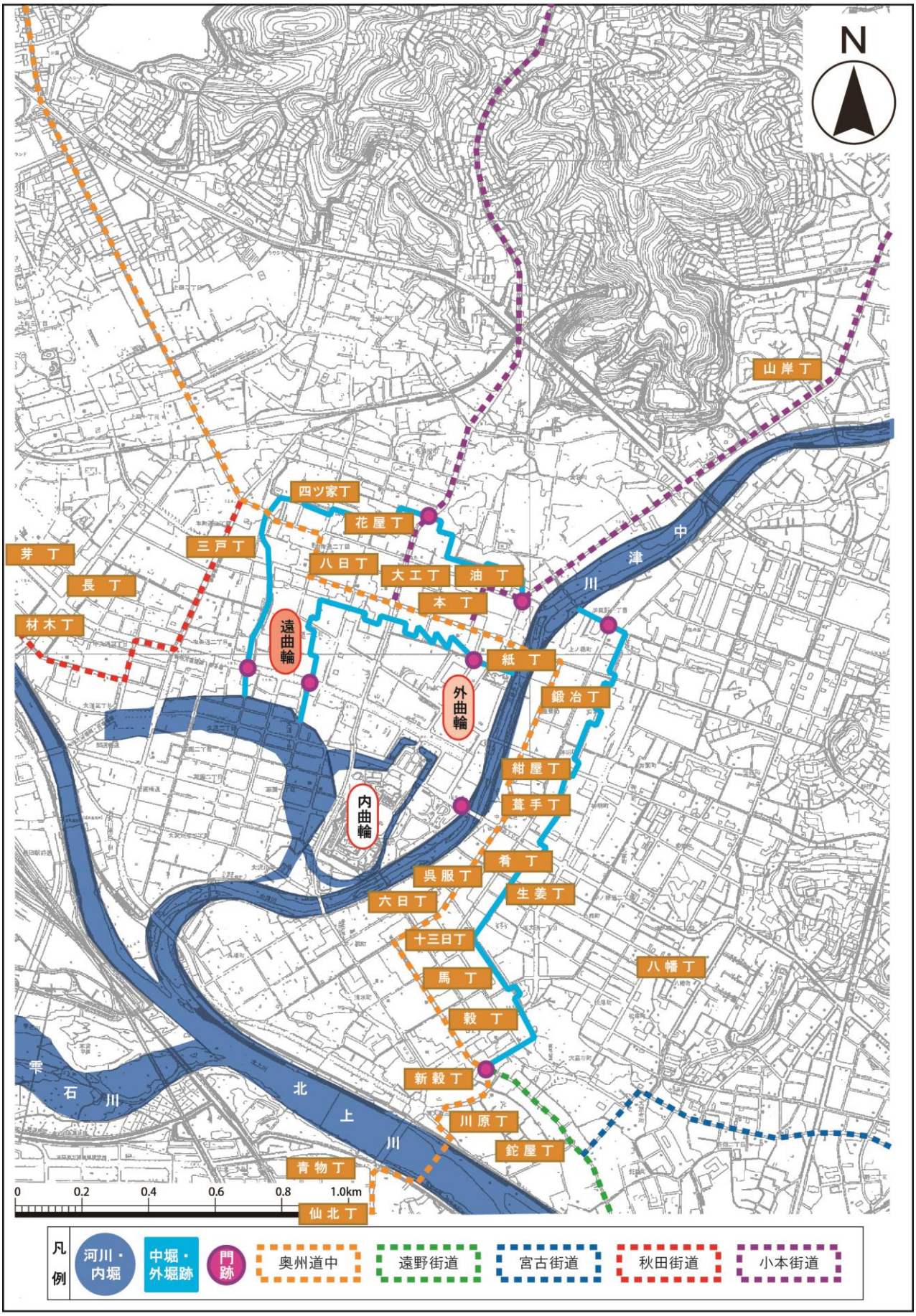
幕末における城下町の範囲は、江戸中期と大きく変化していないが、諸氏屋敷の上田新小路や加賀野新小路が新たにつくられている。



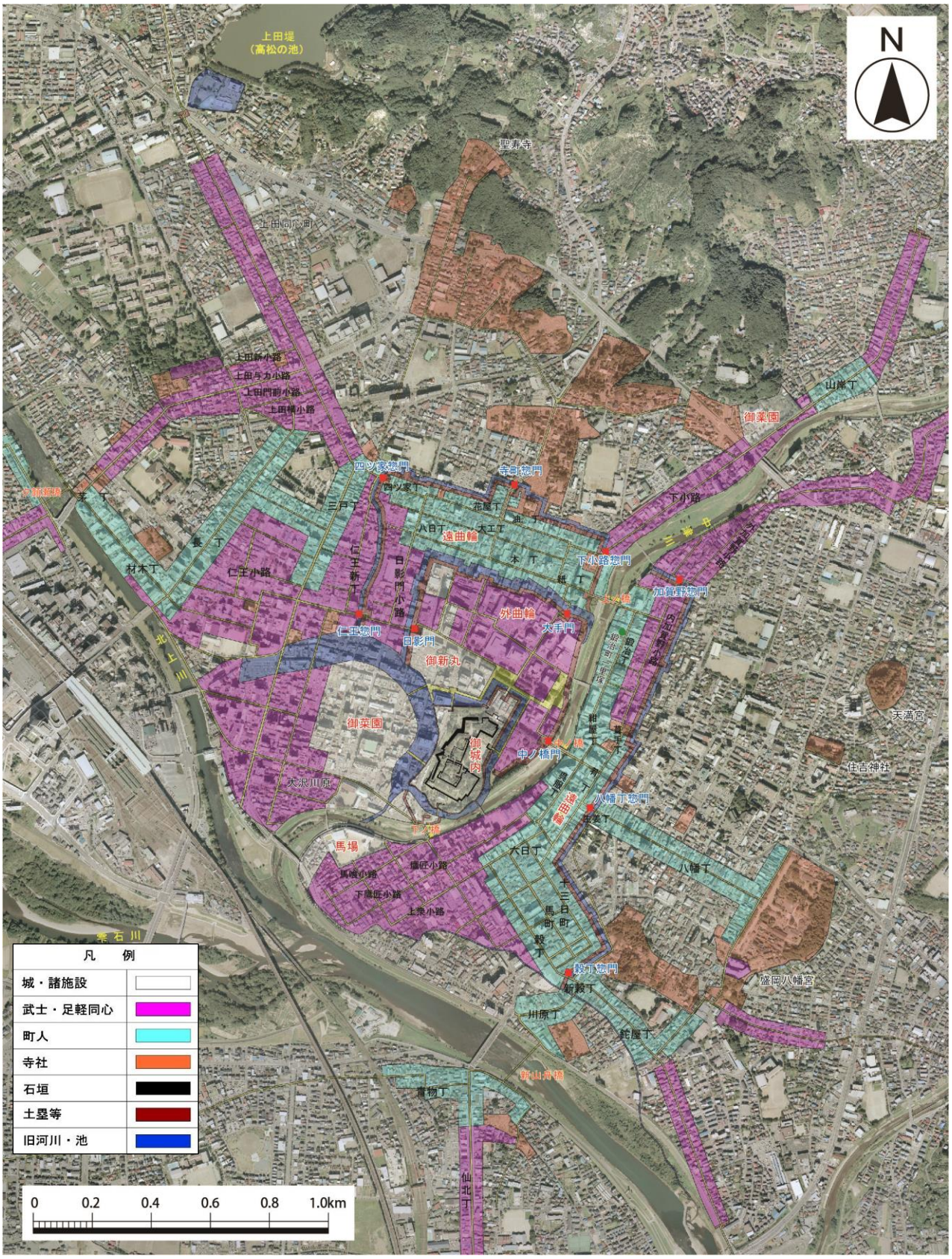
第９図　城下の変遷（中世の不来方周辺）推定図



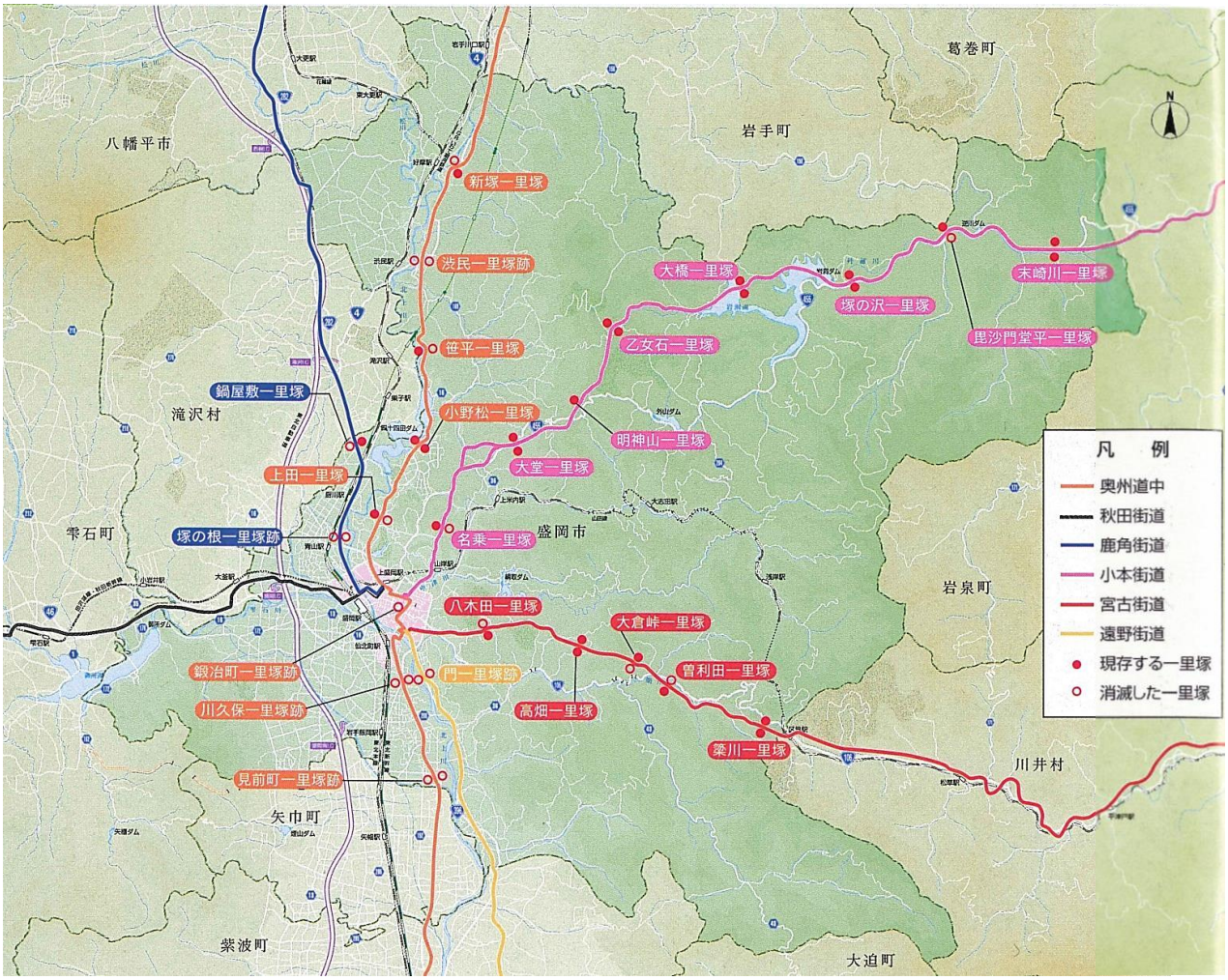
第10図　城下の変遷（江戸時代前期）推定図



第11図　城下の変遷（江戸時代中期～後期）推定図



第12図　城下町の町割と旧町名の分布



第13図　現在の交通網と主要な旧街道の分布

※『もりおかの文化財』(2008) より引用

4　現存する資料

（1）写真・絵図・文献

藩政時代の歴史や盛岡城の普請に関する記録については、大半がもりおか歴史文化館に収蔵されており、盛岡藩家老席日記「雑書（ざっしょ）」（寛永21年（1644）～天保11年（1840）の 197年間の記録のほか、「御城廻御修補」や「老中連署奉書（ろうじゅうれんしょほうしょ）」などの史料により、石垣普請や城内建物の建築等の傍証を得ることができる。

城絵図や城下図等の多くについてももりおか歴史文化館に所蔵されており、おおまかな城郭・城下の構造を知る傍証となるが、建物の構造や寸法がわかる指図等については確認されていない。写真については明治初期に城の西側（菜園側）から、本丸隅櫓（天守・二階櫓）、本丸御殿の一部、淡路丸の吹上門や塀、坂下門（川口門）が写っているものが１枚確認されているのみである。

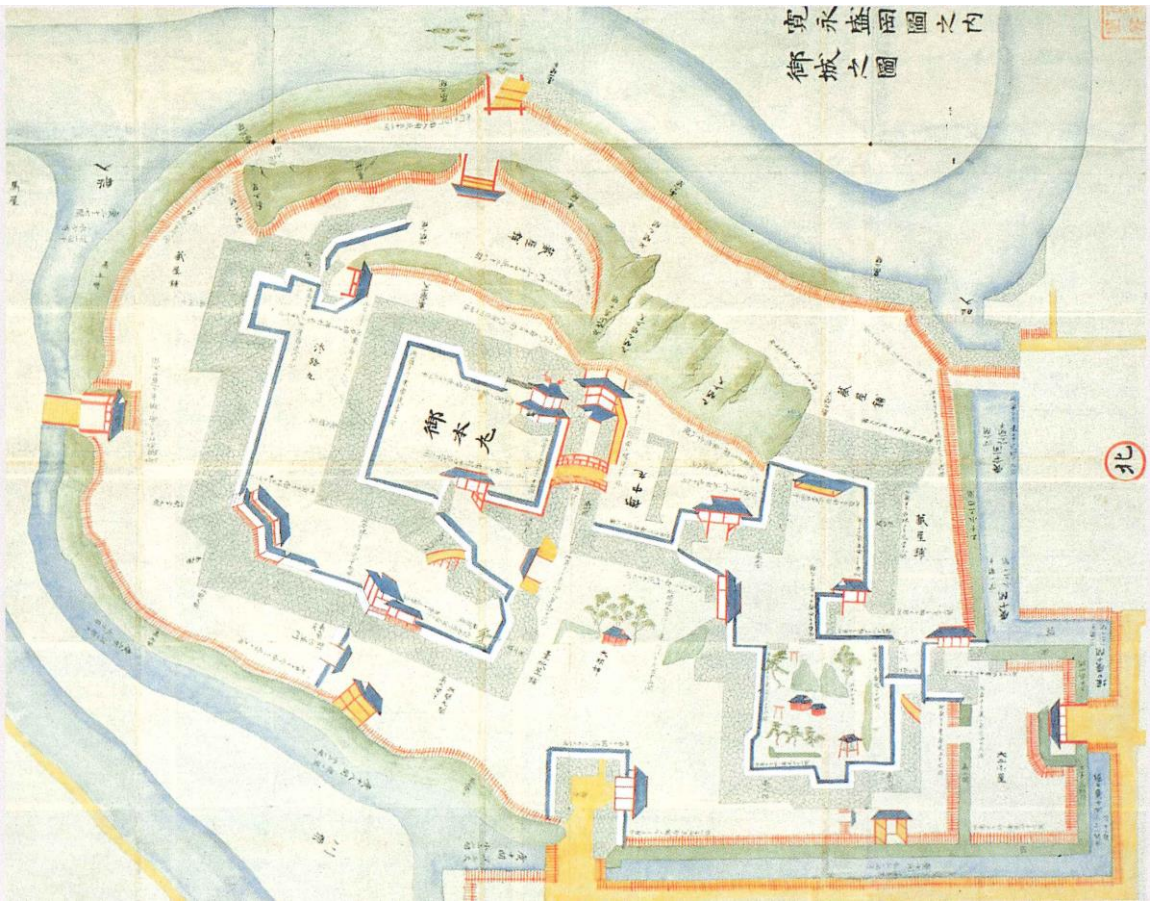
その他、現在までに確認できた史料の所蔵先としては、以下の箇所が挙げられる。

①岩手県立図書館
②国立公文書館（内閣文庫）
③国立国会図書館（稲垣家旧蔵）
④東北大学附属図書館（狩野文庫）
⑤八戸市立図書館（宗（糠塚）家文書）
⑥八戸市立図書館（接待（妙）家文書）
⑦十和田市郷土館
⑧金沢市立玉川図書館近世史料館（加越能文庫）
⑨永福寺
⑩臼杵市教育委員会

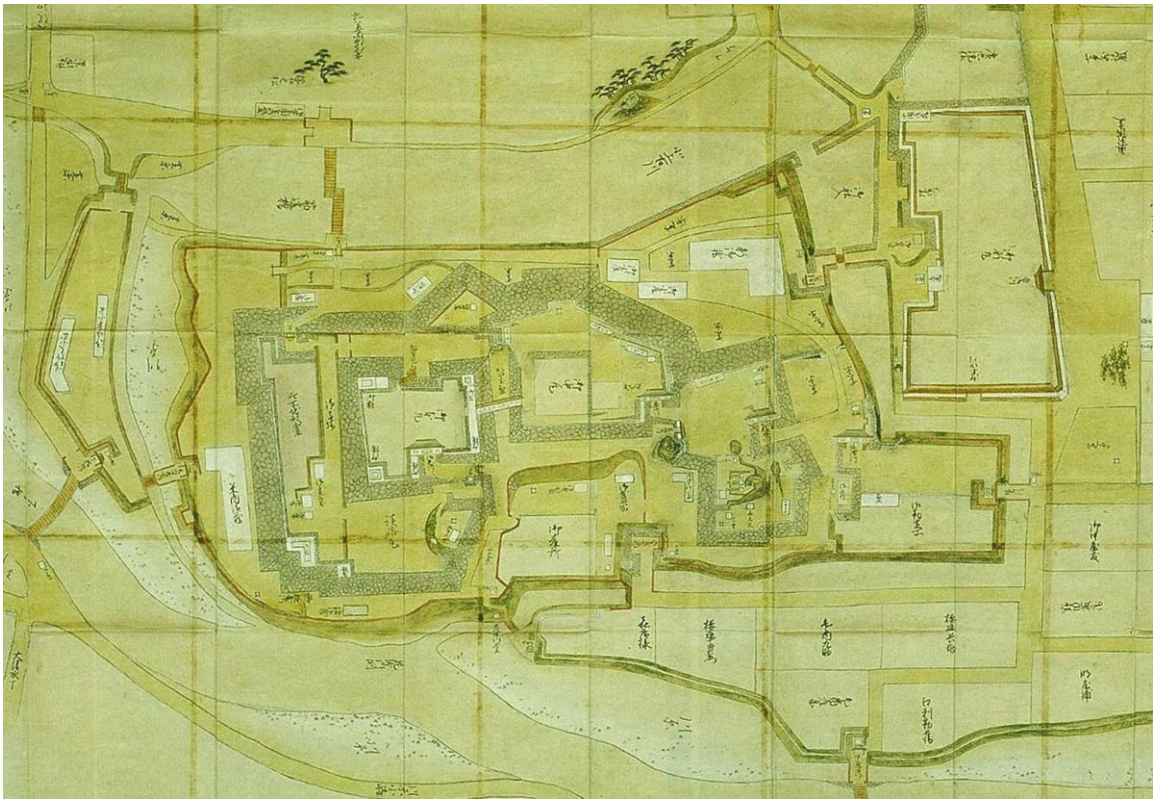
※番号は43～45頁 表８の所蔵欄に対応

盛岡城古写真（明治初期　盛岡市先人記念館　所蔵）

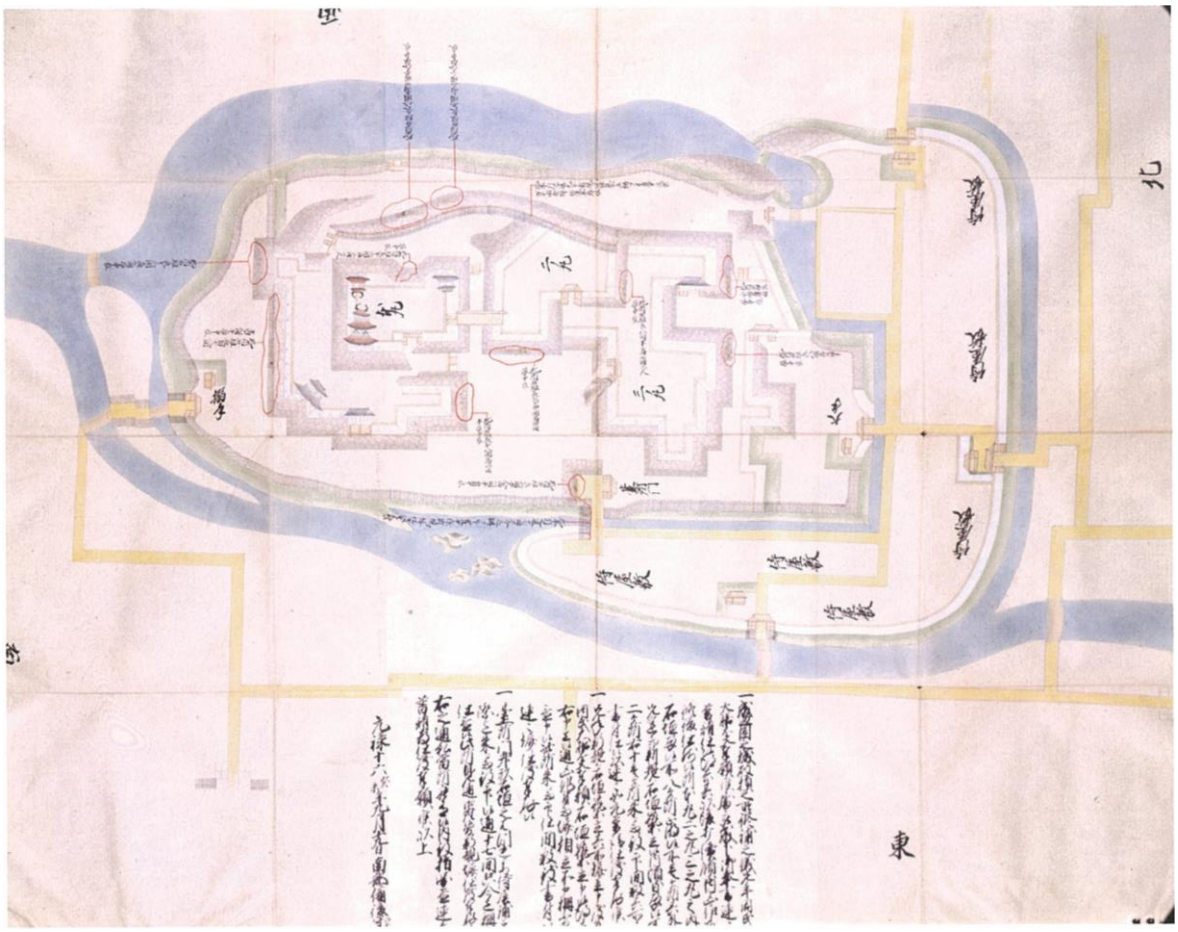
絵図（城絵図・城下絵図）



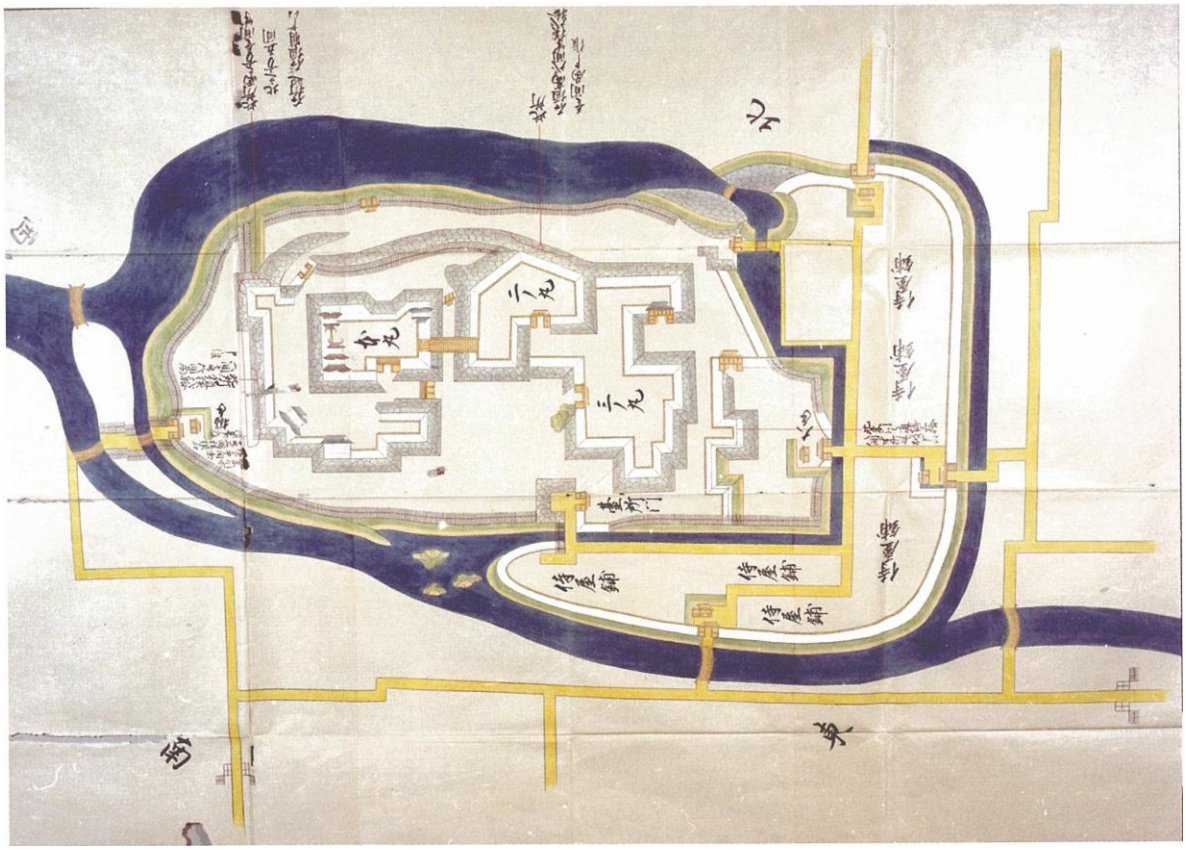
「寛永盛岡城図」　（もりおか歴史文化館　所蔵）※絵図右側が北



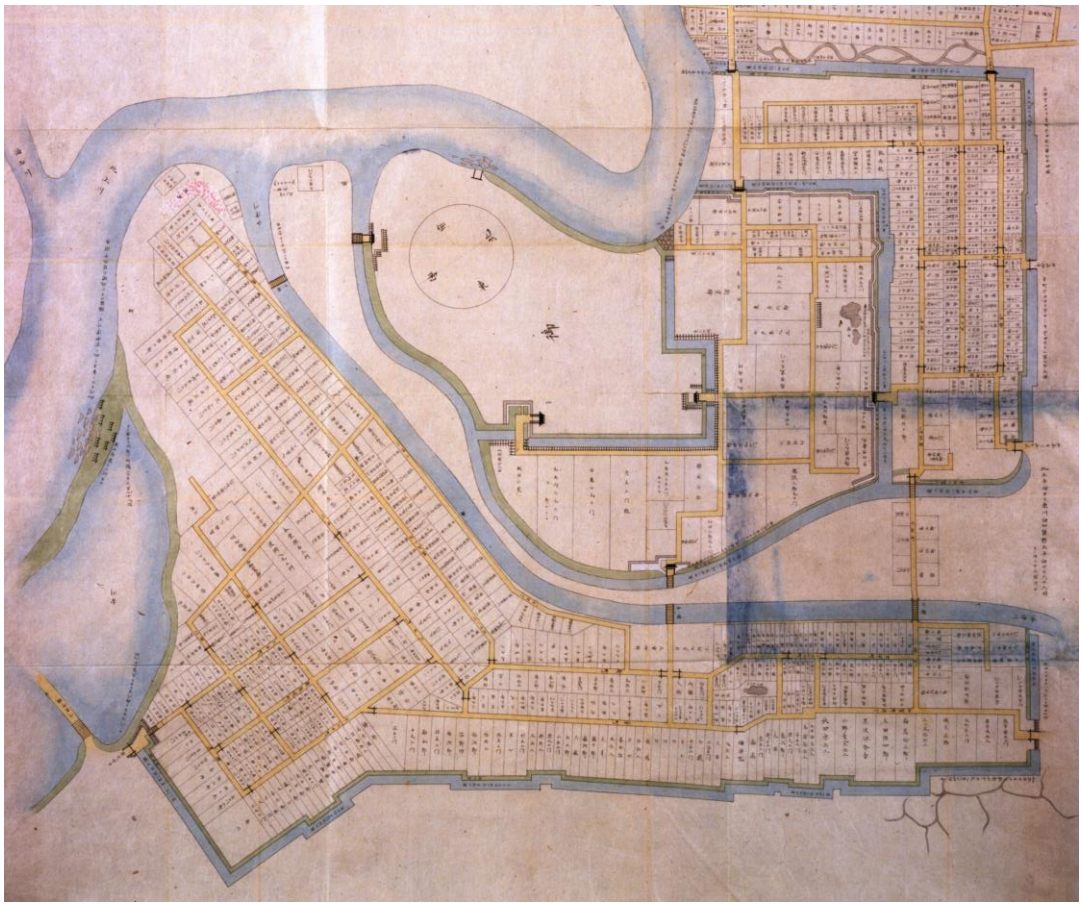
「明和三年書上盛岡城図」〔部分〕　（もりおか歴史文化館　所蔵）※絵図右側が北



「元禄一六年普請伺絵図」　（もりおか歴史文化館　所蔵）※絵図右側が北



「元文五年普請伺絵図」　（もりおか歴史文化館　所蔵）※絵図右側が北



「伝寛永盛岡城下図」〔部分　正保年間〕（もりおか歴史文化館　所蔵）※絵図右側が北

「寛延盛岡城下図」（もりおか歴史文化館　所蔵）※絵図右側が北

表８　盛岡城関係の絵図一覧

所蔵	資料名	年代	概要等
もりおか歴史文化館	盛岡城図 （修補願図）	江戸時代前期	元図は江戸時代前期、城修理願に添付する図面の未使用残、修理予定箇所５箇所表示、蔵書印なし
	盛岡城図 （修補願元図）	江戸時代前期	元図は江戸時代前期、城修理願に添付する図面の未使用残、修理予定箇所５箇所表示、蔵書印なし（上記資料と同一名称・内容であるが、絵図の大きさが異なる）
	盛岡城内図 （本丸二ノ丸平面図）	江戸時代後期 安政元年(1845)以降	本丸二ノ丸の１階部分に限定して部屋の間取と名称を詳細に記載。中奥を黄色、大奥を茶色で着色。舞台が建てられた弘化２年以降で、聖長い楼が撤去された安政元(1854)年以降。南部家蔵書印。確認している３葉の最終
	盛岡城内図 （大奥平面図）	江戸時代後期 天保13年以前	本丸大奥間取図。部屋名等詳細に記載あり、朱書き部分は増改築予定か？南部家蔵書印。天守は描かれず。
	盛岡城本丸図 （大奥平面図）	江戸時代後期 天保13年以前	本丸大奥間取図。部屋名等詳細に記載あり、朱書き部分は増改築予定か？蔵書印なし。（上記資料と同一名称・内容であるが、絵図の大きさが異なる）
	盛岡城本丸図 （本丸平面図）	江戸時代後期 弘化２年～安政元年	部屋名等詳細に記載あり、朱書き部分は増改築予定か？南部家蔵書印あり。霊承院様御台大奥御住居図と同年代
	盛岡城本丸図 （本丸平面図）	江戸時代後期 天保13年以前	部屋名のみでなく形状、素材など詳細に記載あり、部屋の模様を表示した貼札２箇所あり。御三階の表示あり。南部家蔵書印
	盛岡城内図 （盛岡御城大絵図）	江戸時代中期 宝永年間(1704～1711)	本丸・二ノ丸・三ノ丸の建物配置及び間取りが記載。西側石垣上端に柵が表現されている。
	盛岡城本丸図 （本丸平面図）	江戸時代後期 天保13年以前	部屋名のみでなく形状、素材など詳細に記載あり、部屋の模様を表示した貼札２箇所あり。御三階の表示あり。南部家蔵書なし。
	盛岡城図 （伝寛永盛岡城図）	江戸時代前期 正保２年(1645)	石垣の高さ・長さ、本丸･二ノ丸･三ノ丸の広さ、堀の深さ・幅などの表示あり。色彩鮮やか、南部家蔵書印あり。本丸には三階櫓なし、二階櫓のみあり。
	盛岡城下図 （伝寛永盛岡絵図）	江戸時代前期 正保２年(1645)	石垣の高さ・長さ、本丸・二ノ丸・三ノ丸の広さ、堀の深さ・幅などの表示あり。色彩きれい、南部家蔵書印あり、「寛永盛岡図之内御城之図」とあり。本丸には三階櫓なし、二階隅櫓あり。
	盛岡城図 （元禄盛岡城下図）	江戸時代中期 元禄16年(1703)	幕府に提出した石垣修理願に添付した絵図面の控、修理願箇所11箇所、南部家の蔵書印。「元禄十六年癸未年九月十九日　南部備後守　御印判　御居判」とあり。
	盛岡城内図 （宝永本丸二ノ丸図）	江戸時代中期 宝永２年(1705)	幕府に提出した石垣修理願に添付した絵図面の控え、修理願箇所２箇所、南部家の蔵書印。「宝永二年癸酉年五月朔日　南部備後守　印判　花押」とあり。
	盛岡城下図 （元文盛岡城下図）	江戸時代中期 元文年間(1736～1741)	盛岡藩の事業で元文元年(1736)に作成着手、元文３年(1738)段階の様子を表現 個人蔵と２点あり、城内に三階櫓・二階櫓あり。
	盛岡城図 （元文盛岡城図）	江戸時代中期 元文５年(1740)か	作成年代不明、幕府に提出する城修理願に添付する図面控の未使用分。修理予定箇所５箇所、南部家の蔵書印。修復予定箇所とその内容から元文５年(1740)の普請伺絵図の控図と考えられる。
	盛岡城下図 （寛延盛岡城下図）	江戸時代中期 寛延２年(1749)	寛延２年時の城下の様子を表現、城内詳細表現なし。
	増補行程記	江戸時代中期 宝暦元年(1751)	江戸日本橋から盛岡日影門までの道中が描かれる。門・枡形や城下町の様子が描かれている。城内では下曲輪の一部が描かれている。
	盛岡城図 （明和盛岡城図）	江戸時代中期 明和３年(1766)	本丸二ノ丸三ノ丸の他に御新丸・家老席屋敷・御菜園場・桜御馬場などを描写 「明和三年戌三月下斗米小四郎認指上之」とあり、南部家蔵書印あり。
	勘定所図	江戸時代中期 寛政６年(1794)	寛政６年(1794)に下曲輪の勘定所建替えの際に書かれた建物平面図。部屋名や間数が記入されている、南部家蔵書印あり。
	盛岡城内図 （本丸二ノ丸平面図）	江戸時代後期 弘化２年(1845)～安政元年(1845)	中奥は黄色、大奥は茶色で表示、御居間に１箇所、大奥に６箇所、二ノ丸に２箇所付箋あり。貼札は増改築予定箇所か？聖長楼の貼札あり。
	盛岡城御規式儀礼図	江戸時代後期 天保13年(1842)	盛岡城内の儀礼作法を図にしたもの。中ノ丸玄関・広間・大書院等における用法が記され、部屋の配置と規模を知ることができる資料
	盛岡城下図 （天保盛岡城下図）	江戸時代後期 弘化３年(1846)	内容的には元文図を基本に描かれたもの 屋敷の名前は内丸の重臣のみ、寺社名が詳細に表現される、城内詳細表現なし
	盛岡城下古絵図	江戸時代後期 元図は安政年間(1854～60)	川井鶴亭画、城下を南側上空から俯瞰。本丸建物のほか、遠曲輪の堀や中津川三橋等、盛岡の特色や城下町の構成が表現されている。明治期に天守加筆
	菜園図	江戸時代後期 安政３年(1856)	盛岡城西側の菜園の図
	御新丸図	江戸時代後期 文久３年(1863)	部屋名・間数などが詳細に記載されている、星川正甫の絵図説明が右上段に書き込まれる、南部家蔵書印
	城下及近在図	江戸時代後期 慶応年間(1865～68)	慶応元年(1865)に測量されたとされていた絵図、城下と周辺の村とを表現した盛岡全図、城内詳細表現なし。慶応３年か。

所蔵	資料名	年代	概要等
もりおか歴史文化館	盛岡城・馬場小路・下小路御薬園図	明治期	狩野存信画。中津川を挟んで南側からの構図、天守と二階櫓が描かれている。
	明治内丸地図	明治期	櫻山神社が遷座されていないことから明治32年以前のもの。門・土塁・枡形が表現されている。
	旧盛岡城ノ内拝借願絵図面	明治期	作人館中学校建設に伴う図面、縮尺 1/600で彩色。明治23年頃のものと想定
	盛岡城図 本丸二ノ丸平面図	江戸時代後期 天保13年(1842)	本丸二ノ丸三ノ丸の平面図に特徴が書き込まれている。北東部を欠いているが、門などの名称がわかる。
	奥州街道駅程図巻	江戸時代中期 宝暦11年(1761)	煙山秀盈の写、盛岡から江戸までの奥州街道等が描かれる。盛岡城下の部分は東方向から俯瞰し、城内には建物や石垣、門、土塀等が描かれる。
①	盛岡城下内丸屋敷図	江戸時代中期 元文年間(1736～1741)	題せんには「元文年間　盛岡内丸大手先附近屋敷図」とあり
	盛岡城内図(霊承院様御代大奥御住居図)	江戸時代後期 弘化２年(1845)以降	本丸部分の殿舎を描く、「聖長楼」とそれに接続する百足橋の位置に三階建ての懸造りが見られる、霊承院は南部利済の法号で死後に描かれた。
	盛岡城下図 (伝寛永盛岡城下図)	江戸時代前期	江戸前期絵図、正保２年段階の図の写本
	盛岡城下図 (盛岡古図)	江戸時代後期	「正保図」と称し、元図は江戸前期絵図 江戸後期写本
	盛岡城下図 (慶長盛岡図)	幕末 安政５年(1858)	「慶長年間之御城下絵図面　安政５年(1858)午５月町会所用ニ写置之」とあり。盛岡古図の下図か。
②	南部領盛岡平城絵図	江戸時代前期 正保年間(1644～48)	国重要文化財。正保元年(1644)に幕府が諸藩に命じて作成させた城下町の地図 本丸の三階・二階櫓の表現なし
③	奥州盛岡城図	江戸時代中期～幕末	二ノ丸西側に石垣が表現されていない。内曲輪にはそれぞれ門が表現され、周囲の屋敷の配置なども表現されている。
	奥州盛岡城図	江戸時代中期～幕末	宝永２年(1705)作成の盛岡城普請伺絵図と同様の構図。二ノ丸西側に石垣が表現されているほか、本丸の二階櫓・三階櫓・塀・門が表現されている
④	南部盛岡城図	江戸時代	坂口某の写し、彩色本
	南部城内沿革図	江戸時代後期 文化13年(1816)写	外曲輪の重臣屋敷の配置を描いたもの
⑤	盛岡城下図	江戸時代	盛岡城の内曲輪及び外曲輪を表現している。内曲輪は、櫓・門及び蔵が描かれ、外曲輪については、御新丸と重臣屋敷の配置が描かれる
	盛岡城下図	江戸時代	盛岡城の内曲輪及び外曲輪を表現している。内曲輪については、櫓・門及び蔵が描かれ、外曲輪については、御新丸と重臣屋敷の配置が描かれる。彩色無、城郭の構造は、元文年間の普請伺絵図と類似
	盛岡城下図	江戸時代	盛岡城下の通りや道路網を描いている。寺院等の配置のほか、城内を出入りする門のほか街道筋の枡形が描かれている。
	陸奥州森岡城図	明治期以降	加治縫殿助写とあり、国立国会図書館蔵の「奥州盛岡城図」と同様の構図。盛岡城の内曲輪及び外曲輪を表現している。二ノ丸西側に石垣が描かれていない、内曲輪の西側に北上川が表現されていることから、江戸時代中期以前の盛岡城の図を元にえがいたもの。「陸奥」の表題は明治期以降
	盛岡御城御絵図	江戸時代後期 弘化元年	八戸藩主南部信順公が、参勤交代の途中で盛岡城内に立ち寄った際の行程について記したもの。城内の各門のほか、乗物(駕籠)を降りる位置や同行者の待機場所等の指示がある。
⑥	盛岡城勘定所図	江戸時代後期 天保11年(1840)	寛政６年(1794)に建替えられた勘定所の間取り図。部屋名が記入されている
	盛岡城下図	江戸時代 幕末か	盛岡城の内曲輪及び外曲輪を表現。内曲輪は、櫓・門及び蔵が描かれ、外曲輪については、御新丸と重臣屋敷の配置が描かれる。描かれている城郭の構造は、元文年間の普請伺絵図と類似している。宗家文書にも同じ内容の絵図が存在し、この絵図は彩色。
	盛岡城下図	江戸時代 幕末か	表現されている事項は上記絵図面と同様。外曲輪の屋敷地については、全ての建物屋根に鯱が表現されているほか、本来は石垣が存在しない箇所にも石垣が構築されているように表現されている
⑦	盛岡城下図 (寛延盛岡城下図)	江戸時代後期 弘化２年(1845)	寛延２年(1749)段階の城下の様子を表現したもの。城内詳細表現なし。
	御領内鬼柳より田名部迄道中図	幕末 安政３年(1856)	盛岡領の南から北端まで描かれているもの。城下のみ折込図により大きく描かれ、天守と二階の隅櫓が描かれている
⑧	盛岡城図 (寛永盛岡城図)	江戸時代前期 寛永13年(1636)以降	本丸に「寛永13年９月29日火事にて家なし」の注記あり

所蔵	資料名	年代	概要等
⑨	盛岡城下図 (寛延盛岡城下図)	江戸時代中期	寛延２年(1749)段階の城下の様子を表現。城内詳細表現なし
⑩	奥州南部盛岡城図	江戸時代	城下絵図、注記に「大沢川原町水ニテ流」「同年之水ニテ崩申候」等、洪水関係の記述があるもの
	奥州南部盛岡	江戸時代	城下絵図、注記に「大沢川原町水ニテ流」「同年之水ニテ崩申候」等、洪水関係の記述がある(上記資料と同じ内容のものであるが、絵図の大きさが異なる)。
個人蔵	盛岡城下図 (寛延盛岡城下図)	江戸時代後期 寛延２年(1749)	表題は盛岡御絵図分間。盛岡市及び十和田市郷土館所蔵の城下図の下書き。寛延２年(1749)清水秋全による。絵図の表題は「盛岡御絵図分間」
	盛岡城本丸天守屋根葺替瓦葺図	江戸時代 寛保２年(1742)	三階櫓の外観見取図と瓦葺き墨引図、「天守屋根瓦図」とセット
	盛岡城下図 (伝寛永盛岡城下図)	江戸時代前期 正保２年(1645)	屋敷名から正保２年の調査、幕府提出の正保城絵図とは別本 本丸天守、二階櫓なし
	盛岡城下図 (元文盛岡城下図)	江戸時代中期 元文年間(1736～41)	元文図は盛岡藩の事業で元文元年(1736)に作成着手、元文３年(1738)段階の様子を表現。ほかにもりおか歴史文化館収蔵がある。
	盛岡城下図 (寛延盛岡城下図)	江戸時代中期 寛延２年(1749)	寛延図の写しか。
	六曲一双盛岡城下絵屏風	江戸時代後期 文化年間(1804～18)	本丸天守のほか御殿の一部、淡路丸の一部が描かれている。
	盛岡城下町割図 (慶応盛岡城下図)	幕末 慶応３年(1867)	安政図の写本、町名や寺社名を記載。元治２年(1865)の大火被災地表現。城内詳細表現なし。
	盛岡城古写真	幕末～明治初期	菜園方面より本丸・淡路丸の西側を撮影
	城下及近在図	江戸時代後期 慶応３年(1867)	慶応３年(1867)、漆戸茂樹が測量した絵図、城下と周辺の村とを表現した盛岡全図、城内詳細表現なし。
	松前ヨリ盛岡絵図	享保18年(1733)	太田嘉八郎秀典の画。松前から盛岡に至る道中絵巻で、盛岡城下の部分は東方向から俯瞰し、城内には建物や石垣、門、土塀、烏帽子岩等が描かれる。
	六曲一双三本柳古屋迄風景絵屏風	江戸時代後期	絵図部分が取り外されたもので、津志田町から城下までを東から見た構図で描いている。盛岡城本丸三階櫓が描かれる。その右側には別の櫓か御殿が描かれていたと推測されるが、欠損している。
	盛岡城本丸二階櫓東側改築平面図	幕末	本丸南西隅に位置する二階櫓東側の物置建築にかかる平面図
	森岡城之図	明治期	本丸を菜園方面から見た構図で、「盛岡城古写真」に似る。本丸には南西隅の二階櫓、三階櫓、狭間が切られた土塀、淡路丸の西側には同じく狭間が切られた土塀が描かれる。本丸御殿は描かれない。玉風謹写とある。
	台所門桝形付近から八幡宮方面の写真	明治20年代	手前に台所門の石垣、勧業場の建物、さらに奥に向かって中津川を越えて肴町・八幡町と続き、盛岡八幡宮が写る。また、肴町火の見櫓も写る。
	盛岡城古写真ガラス乾板	明治期	周知の古写真と同一で菜園方面からの構図。複製されたガラス乾板であるが、周知のものと比較して、天地左右が広い。

表９　盛岡城関連文献一覧

所蔵	資料名	著者	年代	概要等
もりおか歴史文化館	旧記		江戸時代	加々美遠光から南部行信までの歴史を記述したもの
	盛岡城石垣普請願書		江戸時代	幕府に対し石垣や建物の作事について届出をした文書
	奥南盛風記(おうなんせいふうき)		江戸時代	紀伝体の南部家歴代の記録
	信直書状	南部信直	近世 慶長３年(1598)	八戸千代子あて、豊臣秀吉より築城許可を得る見込みであることが記述されている手紙
	盛岡藩家老席日記 雑書		江戸時代前～後期 寛永21年(1644)～天保11年(1840)	家老席の書記にあたる藩士が家老の政務日記として記したもの 盛岡藩の代表的な公的記録文書
	御城廻御修補(おしろまわりおんしゅうほ)		江戸時代前～中期 寛文５年(1665)～寛保３年(1743)	盛岡城石垣普請、建物作事記録
	老中連署奉書		江戸時代前期 元文５年、寛文７年、寛文13年、延宝７年、延宝八年、天和２年、貞享３年、元禄16年	石垣や建物の修復等について、盛岡藩より幕府へ申請のあったものについて、幕府が許可する内容について回答している文書

所蔵	資料名	著者	年代	概要等
もりおか歴史文化館	盛岡城間数並道改帳		江戸時代前期 正保４年(1647)	国絵図・城絵図を解説するための文書 盛岡城の規模等のほか、領内の地理の概要等が記されている
	南部中道規記	藤根吉当	江戸時代前期 元禄15年(1702)	絵図を解説するための文書、「盛岡城間数並道改帳」の類書 盛岡城の規模等のほか、領内の地理の概要等が記されている 内題「陸奥国南部領盛岡城絵図并陸地海上道規記」
	おうなんきゅうしろく 奥南旧指録		江戸時代中期	南部家歴代の記録
	ゆうせいしき 祐清私記	伊藤祐清	江戸時代中期 寛保年間(1741～44)	収集した古記録を基にして南部信直・利直父子の事蹟を中心に前後の歴史を記録
	盛岡城大手先御堀浚御願		江戸時代中期 寛政12年(1800)	大手先の外堀２箇所が埋まったため、幕府に対し城（下）絵図を添えて修復の許可を願い出、許可を得るまでの顛末が書かれている
	ごうそんこじつけんぶんき 郷村古実見聞記	阿部知義	江戸時代中期 文化元年(1804)	検地、開墾、番所、土地境論など、筆者が在任中に見聞した経済史料
	ぶんろういじ 聞老遺事	梅内祐訓	江戸時代中期 文政５年(1822)	南部家の事跡について記録
	盛岡藩家老席日記 覚書		江戸時代後期～明治期 天保元年(1830)～明治３年(1870)	「盛岡藩家老席日記雑書」と同様に、家老席の書記にあたる藩士が家老の政務日記として記したもの 盛岡藩の公的記録文書
	書抜（藩史草稿）		明治期	藩政時代の歴史を記録
	国統大年譜	四戸武虎	明治期	南部家が所蔵していた多種の古文書・記録を元に明治期に編纂された年表
	きゅうじょうきすうあらためひかえ 旧城木数改扣		明治24年(1891)	旧城地払い下げに関する記録
	旧城地関係記録		明治23年(1890)	旧城地払い下げに関する記録
岩手県立図書館	南部根元記	獅子内杢	江戸時代前期 寛永18年(1641)	南部家始祖から天正19年(1591)までの歴史書
	奥州ノ内南部領盛岡城絵図の帳	一ノ倉某	江戸時代前期 慶安２年(1649)	盛岡城の規模等を記録、城絵図の説明書きと思われる
	ほうふでんまんけい 宝譜伝万莖		江戸時代中期	歴代の事績、公儀への献上物控、初代信直ほか各藩主・一門の花押、盛岡藩領内郷村帳
	ほうかんるいしゅう 宝翰類聚	伊藤祐清・円子記	江戸時代中期 寛保年間(1741～44)	藩士所伝の古記録をまとめたもの
	奥州盛岡城并領内道規御書上写	本堂親岡	江戸時代中期 明和９年(1772)	正保国絵図・城絵図の解説書 盛岡城の規模のほか、領内の地理等に概要が記載されている 同様の資料がもりおか歴史文化館に所蔵されている
	たけだからくり 竹田加良久里	持仏堂主人	江戸時代中期 文政６年(1823)	天明４年(1784)～文政３年(1820)までの盛岡藩の変遷史、風俗史
	邦内郷村志	大巻秀詮	江戸時代中期 明和～寛政年間(1764～1801)	藩内の地誌、郡町村の石高・戸数・人口・社寺などを記録
	とくえんかくん 篤焉家訓	市原篤焉	江戸時代中～後期 文化～天保年間(1804～44)	中世から近世に至る藩内の諸記録を編集
	見聞随筆	横川良助	江戸時代後期	盛岡新山船橋記、岩手山の噴火、盛岡の大火など、盛岡藩関係の記録
	奥々風土記	江刺恒久	幕末 嘉永～安政年間(1848～1860)	藩内の風土記をまとめたもの
	参考諸家系図	星川正甫	幕末 文久年間(1861～1864)	南部氏一門をはじめ、藩士 2,700余名にも及ぶ所伝の家系図集
	石垣組立秘伝写		江戸時代後期 寛政４年(1792)	盛岡藩御用職人平栗家に伝わる石垣技術解説書の写し。江戸の石垣師上田三郎右衛門より伝授された石垣技術を文章や図を交えて解説している。 現存するのは明治以降の写本
	ないしりゃく 内史畧	横川良助	幕末 安政年間(1854～60)	前編は、『奥南旧指録』『盛岡砂子』『登曽草紙』等からの収録 後編は、藩の財政事情、百姓一揆、凶作など、後世に伝えるべき事柄を採録
宮古市北上山地民俗資料館	門馬別当御材木証文		江戸時代	旧川井村教育委員会「門馬別当御材木証文　早池峰乃ひのき」（川井村郷土史追録(1)）に、門馬別当檜文書として承応２年(1653)から元禄15年(1702)まで掲載。「二階三階御矢蔵御材木之事」（延宝２年６月２日）の記事あり。

（２）現存移築建築物（部材）等（48頁第14図）

藩政時代より盛岡城内に残っていた建物、または城内から移築されたという伝承をもつ建築物は以下のとおり。

このうち④の彦蔵（市指定文化財）については、城内に残る唯一の建築物であったが、都市計画道路下ノ橋更ノ沢線拡幅工事に伴い、史跡指定地外から移設されたものである。

表10　現存移築または部材を使用した建築物等一覧（口伝・伝承を含む）

	旧建物名称・旧位置	現在の名称（移築場所）	備　　考
①	勘定所建物・下曲輪勘定所 【部材】	徳清商店佐藤家住宅母屋 （盛岡市仙北一丁目）	中ノ丸の勘定所との説あり。 盛岡市景観重要建造物
②	城門（薬医門・台所屋敷内） 【移築】	清水寺山門（盛岡市西見前）	棟札「上棟」「御門」「明治十三年九月七日」記載 御台所の門との伝承
③	城門（薬医門・旧位置不明） 【移築】	報恩寺中門（盛岡市名須川町）	
④	彦蔵（淡路丸南西下） 【移築】	彦蔵・城内（公園内）に移設保存	旧米内蔵の位置に移設
⑤	綱御門 【部材】	櫻山神社神門	部材を使用したとの伝承
⑥	土蔵（旧位置不明） 【部材】	浜藤ホール（盛岡市鉈屋町）	部材を使用したとの伝承
⑦	土蔵（旧位置不明） 【部材】	木津屋本店３号倉 （盛岡市南大通二丁目）	払下げ建物との伝承
⑧	土蔵（旧位置不明） 【部材】	旧岩山漆芸美術館Ｄ棟 （盛岡市加賀野字才ノ神）	払下げ建物、移築された後、再移築したとの伝承
⑨	城門（棟門・旧位置不明） 【移築】	昆家住宅門（紫波郡矢巾町高田）	払下げ建物との伝承

第14図　現存移築建築物等（伝承地）位置図

５　明治維新後の盛岡城跡

（１）明治維新と盛岡城

盛岡藩が戊辰戦争に敗北した結果、盛岡城は明治政府の直轄地となり、兵部省（明治５年から陸軍省）が管轄した。盛岡藩第16代藩主南部利恭は、明治元年（1868）に領地を没収され白石に転封されたが、翌明治２年（1869）には盛岡藩の藩知事となり、盛岡城は13万石の居城となった。しかし明治３年（1870）、利恭は藩知事を辞任、鳥取藩、名古屋藩、熊本藩とともに全国に先駆けて政府に廃藩を願い出て、明治政府により盛岡県が設置された。

当初の盛岡県庁は盛岡城の中ノ丸に置かれたが、翌明治４年（1871）には旧藩主別邸であった広小路御殿（現在の岩手県庁敷地）に移転、城内は明治５年（1872）に兵部省から変わった陸軍省東北鎮台の所管となった。盛岡城は、明治６年１月太政官布達「全国城郭存廃ノ処分並兵営地等撰定方」において、存城の一つに選定されたが、本丸及び二ノ丸、三ノ丸等の建物の維持が困難であると判断されたことから、数棟の土蔵のほか石垣や土塁を残して払い下げられることとなった。明治７年（1874）３月、城内の建物に一般入札の広告が出され、翌月に十三日町の小道具屋善五郎に約 2,700貫文で払い下げられ、城内建物や樹木の大半が撤去された。

なお、払い下げられた一部の部材については明治12年（1879）頃まで城内等に保管された後、周辺の商人や寺社等に引き取られ、建築部材として再利用されており、盛岡市内やその近郊において、部材を活用したと伝えられる建物が存在している。

（２）櫻山神社の遷座

櫻山神社は、寛延２年（1749）第８代藩主南部利視が、初代南部信直の功績を称え社殿を城内の淡路丸に建立したのが始まりとされる。

当初は淡路丸大明神と称されたが、文化９年（1812）に神社付近にあった桜の木にちなみ櫻山大明神と改名した。盛岡城の廃城に伴い、明治４年（1871）に加賀野妙泉寺に、さらに明治10年（1877）には南部家菩提所の麓に遷座、明治33年（1900）３度目の遷座により現在地に鎮座した。

表11　櫻山神社の遷座に関する経過

寛延２年(1749)	盛岡城内の淡路丸に「櫻山御宮」創建（初代藩主南部信直を祀る）され、淡路丸大明神と称される
文化９年(1812)	櫻山大明神と改称
明治４年(1871)	明治維新により南部家の庇護を離れ加賀野妙泉寺山へ仮遷座
明治５年(1872)	村社櫻山神社創建
明治10年(1877)	南部家菩提寺聖寿寺跡地に再遷座
明治14年(1881)	県社に格上げ、例大祭開始
明治33年(1900)	盛岡城跡地の現在地(下曲輪)に三度目の遷座

（３）岩手公園の開園

城跡地（内曲輪の大部分）は、明治23年（1890）に南部家が国から縁故払い下げを受け、明治36年（1903）から岩手県が公園整備計画に着手、明治39年（1896）に南部家と岩手県知事の間で、「土地使用貸借契約書」を締結し、日比谷公園の設計案の策定など、東京府の公園整備に携わった長岡安平の設計原案により整備工事に着手、同年９月15日に岩手公園として開園した。

公園の開園を機に、盛岡城跡は広く県民・市民の憩いの場として開放され、以来、盛岡市・岩手県のシンボルとして愛されている。設計原案の作成に当たった長岡安平は、地域の自然や特色を生かすことを公園設計の要諦としており、特に岩手公園においては、整備に当たり南部家と岩手県と交わされた貸借契約書に「城域の保存」を重んじることが明記されていたことなど、城郭の遺構を生かしながら近代的な公園としての機能を備えたものとすることに配慮が払われ、各曲輪の形状や石垣を大きく改変することなく、四季を楽しめる花木や草花を植栽し、曲輪の平場を芝生広場として、内堀を生かしながら鶴ケ池を整備するなどの手法がとられた。

なお、当時の工事規模や概要については、次のように記録されている。

【設計・施工の概要】

職工・人夫26,059人（失業対策事業）、坪数約14,000坪、総工費約21,400円（県費14,000円・寄付金等 7,400円）、運動場約 1,200坪、花壇約 300坪、設計主任：長岡安平・田中眞次郎（設計段階では「巌手縣公園」）工事監督：一戸三矢（後の盛岡市長）

【整備の概要】

全体を第壱区（本丸・二ノ丸・三ノ丸）、第弐区（淡路丸）、第参区（台所など周囲）に分けて整備

本丸・二ノ丸：松・紅葉植栽、吹上馬場：桜林植栽、中津川畔淡路丸：梅林植栽、吹上の坂：桃林植栽、鶴ヶ池・亀ヶ池：浚渫、堀を花崗岩で堤状に区分け、護岸石は小さめの花崗岩・藤棚設置、台所：運動場の整地、鍛冶蔵跡：花壇の設置、四阿８棟（凌虚亭、夕日亭、望岳亭、拾翠亭、観月亭、枕流亭、双龍亭、聚芳亭）・側溝・道路・階段・橋・電灯・標識を整備

①盛岡城建物解体と城跡地の払い下げ

明治元年(1868)	９月、戊辰戦争で盛岡藩降伏 10月、城内が新政府の直轄地となる 12月、盛岡藩16代藩主南部利恭が白石に転封される
明治２年(1869)	７月、南部利恭が盛岡に復帰、13万石の居城となる
明治３年(1870)	10月、盛岡藩を盛岡県とし、県庁を二ノ丸に設置する（明治４年には城外に移転） 県により、遠曲輪・外曲輪の堀、土塁が民間に払い下げられる
明治５年(1872)	城域の全てが陸軍省東北鎮台の所管となる
明治６年(1873)	１月14日付け、「全国城郭存廃ノ処分並兵営地等撰定方」が明治政府から布達され、盛岡城は存城とされる
明治７年(1874)	３月、県により一般入札が行われ、城内建物や樹木が払い下げられ、解体撤去される。なお、部材の一部は城内に保管される

	（払い下げ物件） ・本丸建物 1,493坪（三重櫓、二階櫓、土蔵、板蔵、小屋、本丸門、百足橋、稲荷堂、稲荷鳥居、磨銅鯱、休息所等） ・二ノ丸建物 456坪（櫓、車門、鵜住居門、不明門、瓦門、番所、堂、小屋等） ・三ノ丸等建物94坪（鳩門、土蔵、番所等） ・その他（榊山稲荷社、鳩森八幡社、城内の松 864本、欅45本、栗６本、雑木58本）「布達文書」
明治12年(1879)	解体された城内建物の部材が建築部材として再利用される
明治22年(1889)	５月17日付け、南部利恭から国に対し城跡地の払い下げ依頼提出 陸軍大臣秘書官　福家安定　南部伯爵家扶　南部晴景殿 一　盛岡城　地積　弐万六千八百四拾壱坪　建物八拾弐坪 二　伸御代償之儀ハ豫定ノモノニ付、他ニ相漏レ以テハ差支候間、御注意有之度申渡候也（ 7,500円） ８月９日付、岩手県知事宛に払い下げ願いが提出される 陸中国盛岡旧城趾御払下願 岩手県知事　石井省一郎　殿 東京府神田区西小川町二丁目九番地　従四位伯爵御名代理 岩手県盛岡市八幡町百四十三番戸　尾崎懋
明治23年(1890)	３月15日、城地が国から南部家に縁故払い下げを受ける （前払金 4,000円上納） 「指令甲 13309号」　南部伯爵宛　岩手県知事　石井省一郎 一　陸軍省所管旧盛岡城趾　面積　弐万六千八百四拾壱坪　但木石現在ノ通　土蔵弐棟（敷地26,841坪、建物蔵２棟82坪、石垣 4,200坪、立木 1,304本） ９月18日、残金（ 3,500円）については月割納付とする旨の通知を受ける「指令甲 12815号」南部伯爵宛　岩手県知事　石井省一郎
明治24年(1891)	南部家が杣（杉） 833本、松74本、御用ノ松74本、栗15本、胡桃44本、桜46本、雑木２本、槻（欅）46本、合計 1,304本（ほか86本は朽木）を売却 御払代償金７円50銭（明治24年５月15・18・19・20日調査による）

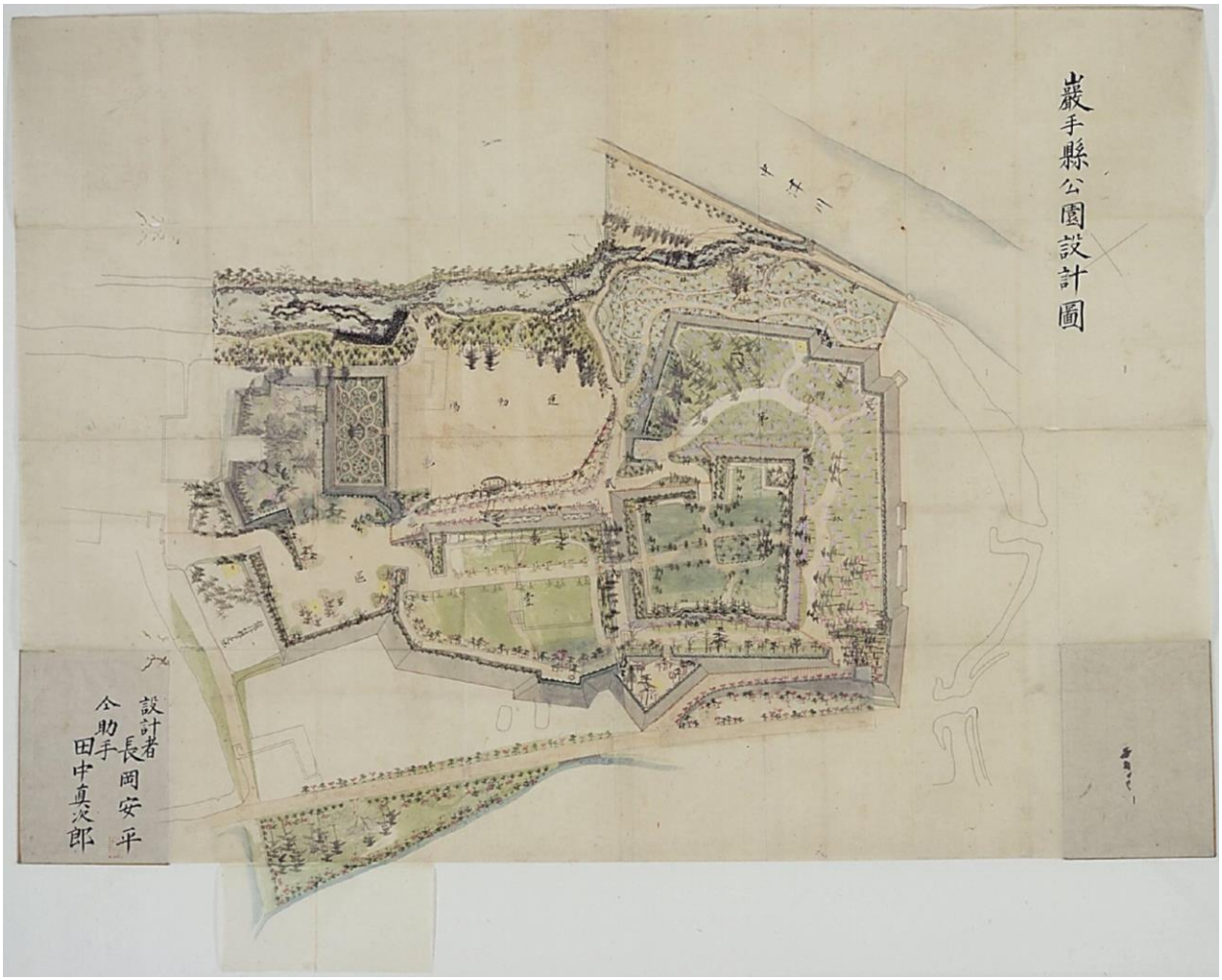
②公園整備計画

明治36年(1903)	12月21日、北条元利知事が、盛岡（内丸）公園は規模が狭小で、さらに人家に介在するために公共の娯楽の目的を達成できないので、これを売却して盛岡城跡を借用して公園整備する案を提出（12月24日　県議会可決）
明治39年(1906)	３月24日、南部利淳と押川則吉知事の間で、９条からなる「土地使用貸借契約書」を締結（46,077㎡） ４月14日、凶作による窮民救済事業（労役扶助）として、運動場や花壇を兼ね備えた公園として整備に着手 ７月17日、土地使用貸借契約変更書」を締結、亀ヶ池・鶴ヶ池と現在の都市計画道路下ノ橋更ノ沢線の西側（現：教育会館・産業会館・民家）も追加（20,757㎡）

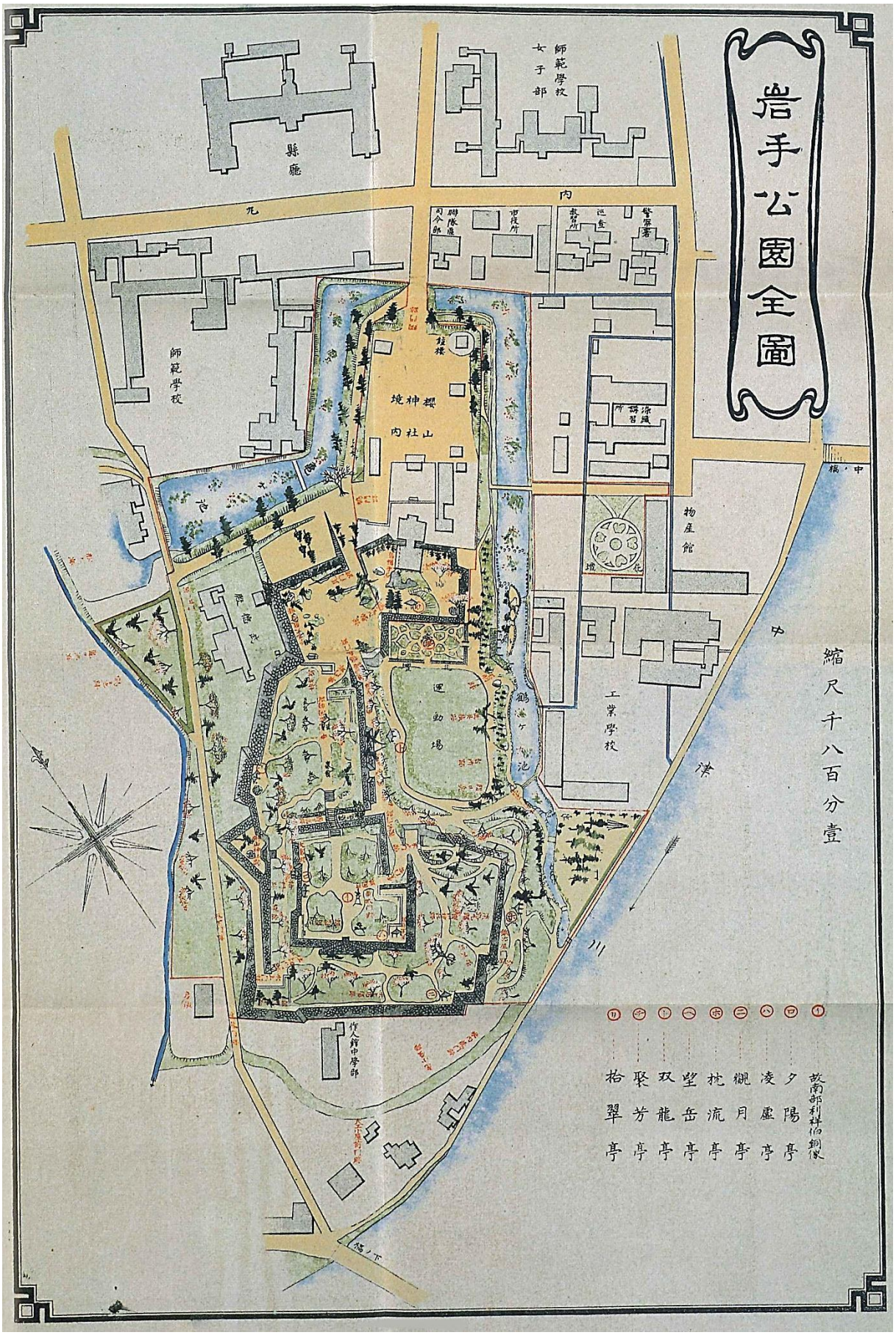
③岩手公園の開園

明治39年（1906）	９月11日、押川則吉知事　岩手県告示第 382号「盛岡城趾ニ造営シタル縣公園ハ巖手公園ト称シ本月十五日開園ス」
明治39年（1906）	９月15日、式典内容：午前10時砲、工事報告、知事式辞（押川知事）、来賓祝辞（南

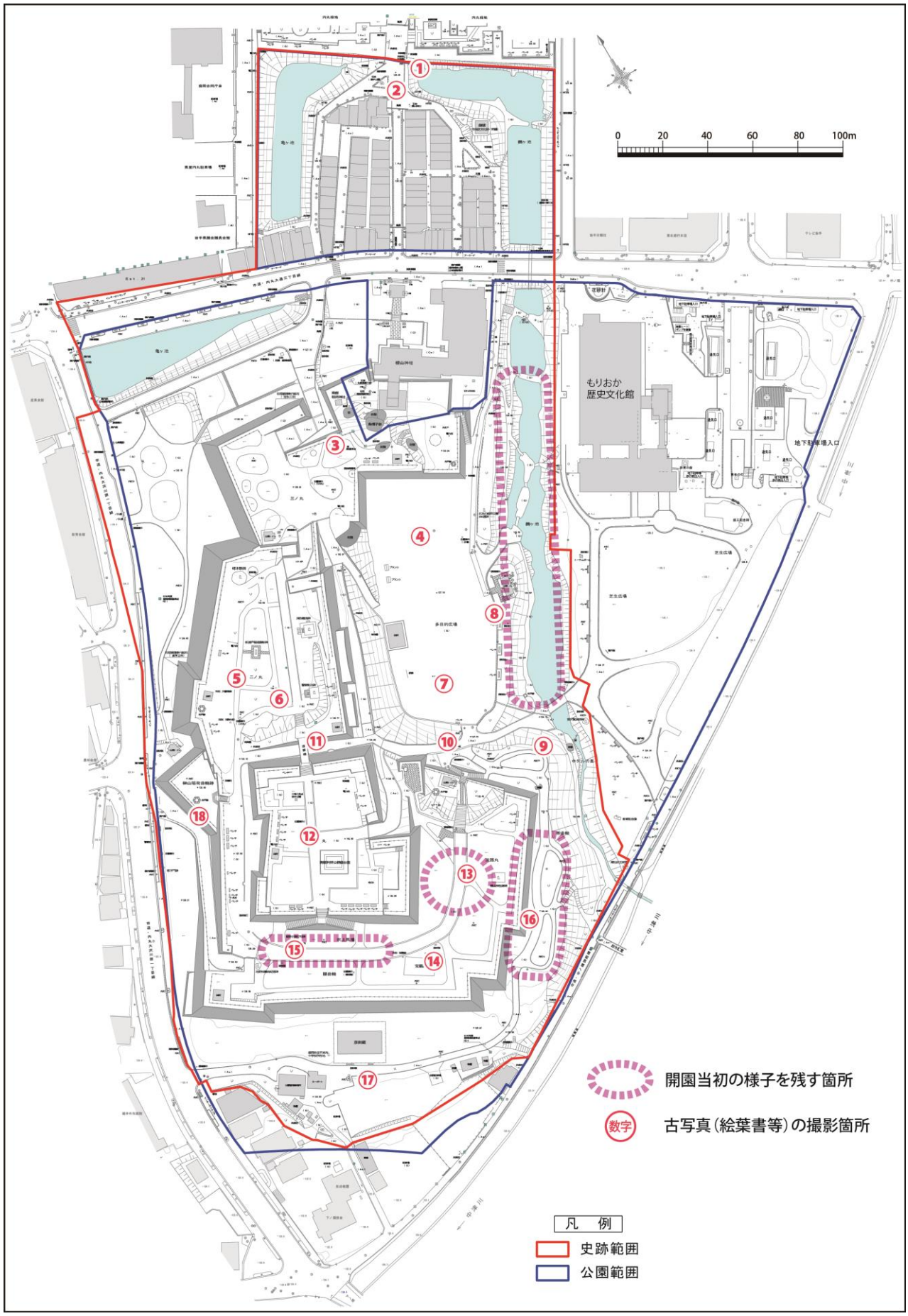
	部利淳、阿部豊年、長谷川郡長、北田市長） 〇余興：楽隊、煙花、写声器、軽気球、手踊、太神楽、参差舞、はやし舞、獅子踊、電気煙花 〇出店：そばや、すしや、豚肉店、酒店、田楽ビール枝豆店、酒屋、煎餅ビール店、あべ川餅店
明治41年(1908)	９月15日、南部利祥伯爵銅像除幕式（鋳造：久野留之助、台座：田山傳次郎） 武徳殿の建築



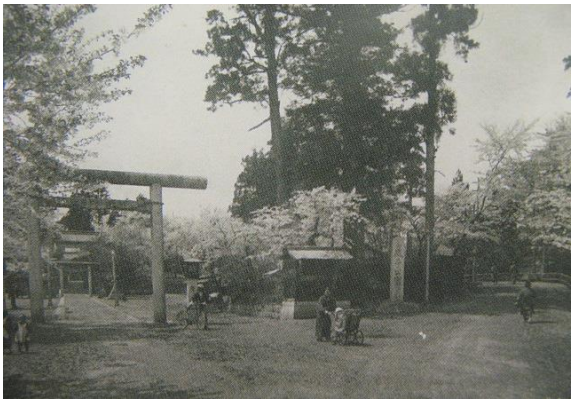
第15図　「巖手縣公園設計図」（財）東京都公園協会 所蔵（図面左が北）



第16図　「岩手公園全図」大正期（図説盛岡四百年下巻Ⅰ）

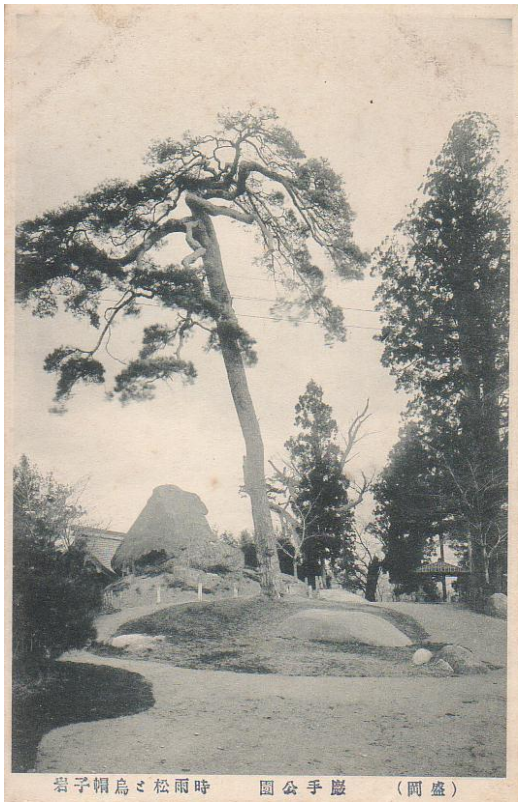


第17図　開園当初の意匠等が残る範囲



①櫻山神社二ノ鳥居（下曲輪）

②櫻山神社二ノ鳥居（下曲輪）



③時雨の松と烏帽子岩（三ノ丸）

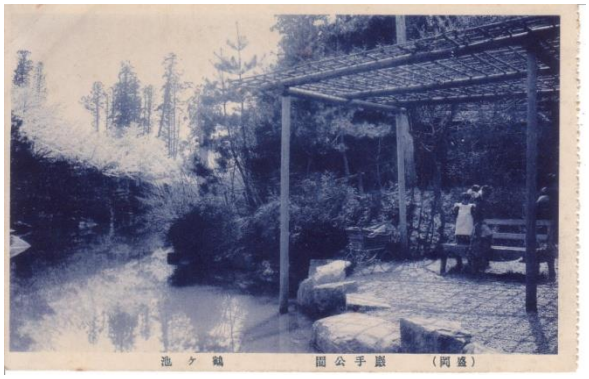
④花壇より三ノ丸（台所）

⑤望岳亭と岩手山（二ノ丸）

⑥中ノ丸南側（二ノ丸）

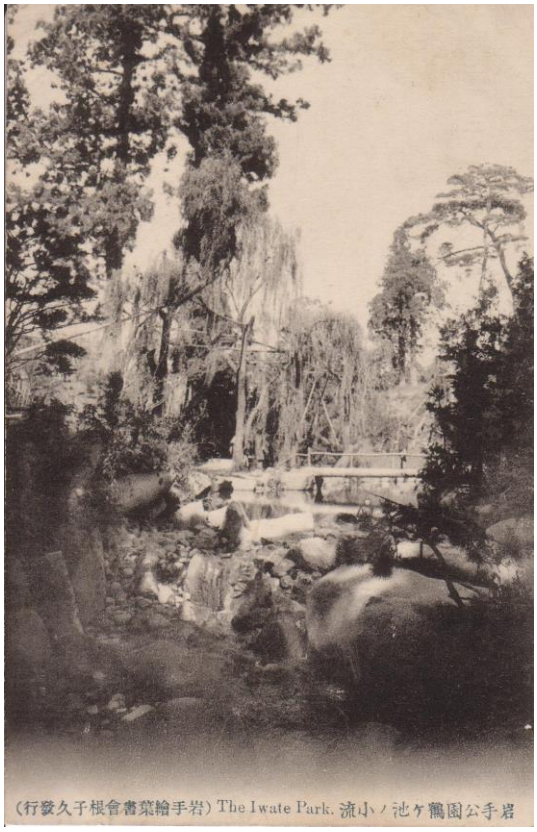
⑦三ノ丸から広場（台所）

絵葉書にみる明治期～昭和初期の岩手公園（１）



⑧鶴ケ池と藤棚（内堀）

⑩淡路丸北東側の石段（淡路丸）



⑨鶴ヶ池と桟橋（内堀）

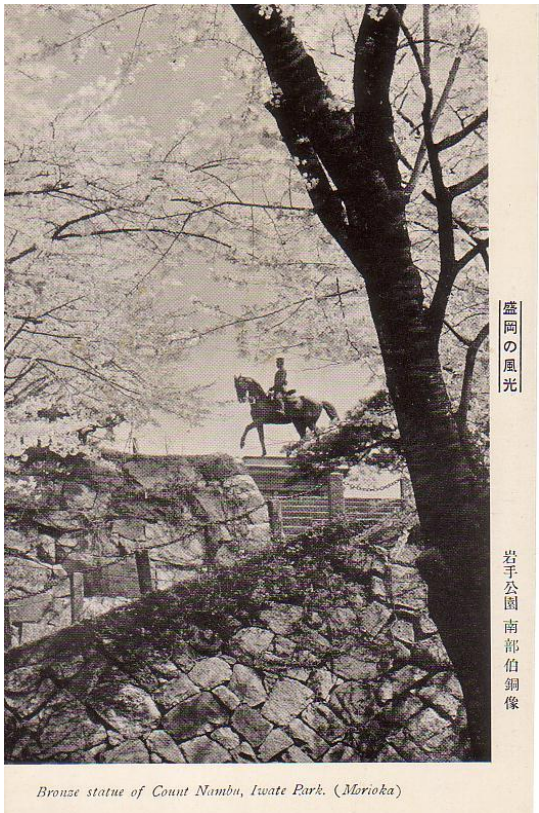
⑪渡雲橋（二ノ丸から本丸）

⑫南部中尉銅像（本丸）

⑬旧櫻山大明神（淡路丸東側）

⑭桜林（淡路丸中央）

絵葉書にみる明治期～昭和初期の岩手公園（２）



⑮本丸と石段（淡路丸）

⑯梅林（鉛蔵）

⑰淡路丸から望んだ中津川方面（淡路丸）

⑱吹上門の坂下（孫蔵）

絵葉書にみる明治期～昭和初期の岩手公園（３）
（絵葉書①～⑨、⑪～⑱もりおか歴史文化館収蔵　⑩個人蔵）

（４）戦前の公園整備

昭和９年（1934)、公園の管理が岩手県から盛岡市に移管されることに伴い、市は南部家からの寄付と岩手県の補助を受ける形で土地の買収を行い、維持管理を行うこととなった。

取得する土地は岩手公園として開設されていた範囲と、岩手女学校（現岩手女子高等学校）へ貸付中の敷地（現在の公園管理事務所付近）を含むものとされた。併せて、公園看守人詰所、物置、人夫詰所、四阿７棟、便所６棟、花籠堂１棟、猿小屋、熊小屋については、岩手県から無償で譲渡された。

昭和９年(1934)	６月６日、岩手公園の管理が県から市に移管されることに伴い、南部家との間で敷地買収交渉が行われ、買収の条件（金額・範囲等）についての覚書が盛岡市と南部家との間で交わされる。 12月１日、県より移管を受けた盛岡市が南部家より土地を購入、管理を行う。(内丸57番１、２、３、７を購入) 買収は公園の範囲とし、城下道路の西側一帯（現　教育会館・産業会館）を除き、岩手女学校（現　岩手女子高等学校）へ貸付中の敷地（現在の公園管理事務所付近）を含む。(昭和９年６月６日付覚書による）なお、施設は岩手県から無償交付される。(昭和９年12月３日付　岩手県指令庶第 288号による。) 水道開通を記念して鶴ケ池に噴水を設置（噴水等は戦時中に供出） 噴水の周囲に銅製の鶴が置かれる。
昭和11年(1936)	５月、中津川からポンプにより鶴ケ池へ給水していたものを、水道からの給水に切り替える。(同年11月まで)

６　発掘調査

史跡指定地内では、昭和 59 年度から石垣修復工事等に伴う発掘調査を実施している。

ここでは、石垣修復工事や整備計画立案のために、淡路丸及び本丸・二ノ丸・三ノ丸で行われた発掘調査を中心に、公園施設整備や道路拡幅等に伴い、史跡地内及び隣接地で行われた調査成果の概要について略述する。

調査成果の詳細については、発掘調査報告書が未刊行のものもあるが、盛岡市・盛岡市教育委員会（1991）『盛岡城跡Ⅰ－第１期保存整備事業報告書』、盛岡市教育委員会（2008）『史跡盛岡城跡Ⅱ－第２期保存整備事業報告書－』等の報告書を参照されたい（調査範囲は 67 頁第 18 図、実績は 68・69 頁表 12）。

（１）保存整備事業に伴う発掘調査

ア　淡路丸地区の調査

昭和 59 年度から平成２年度にかけ、淡路丸の石垣修復に伴う発掘調査を実施し、不来方城期から盛岡城終末期（明治初期）までの遺構変遷が把握されている。

不来方城期の遺構は２小期に分かれるが、当初は基本的に等高線に沿うように曲輪が構成されており、南東部並びに南西部では外側に張り出し、中央の低地部分で本丸側に入り込んでいる構造であることが確認されている。次の段階では当初の構造を踏襲しているが、曲輪を嵩上げして曲輪を造成するとともに縁辺に土塁が構築されている。

盛岡城１期の段階では、不来方城期の曲輪にさらに盛土が施されて、淡路丸の南東部では盛岡城２期以降の淡路丸と同じ高さまで盛土されているが、最終的に石垣の構築された西側では大規模な盛土は施されなかったようで、この時期には縁辺部に横矢掛りの折邪を有する木柵を巡らせている。

盛岡城２期には淡路丸上部に盛土が施されるとともに、法面下部を根切りして石垣が構築されている。この段階の淡路丸には、南東部に櫓２棟があり、これらから西端の吹上門の枡形に至るまでは、石垣内側が土被りとなった幅３～４メートルの武者走りが巡っていた。さらに、この武者走り内側の範囲は東西 98 メートル､南北 14 メートル以上の大きな窪地となっており、幕末までの期間で徐々に平坦な地形に変化していたことが確認されている。

盛岡城３期以降は前述の窪地に盛土が施される一方、淡路丸西端に櫓（SB440）が建てられていた。また、江戸時代後期以降には補修石垣（ハバキ石垣）が構築されたほか、曲輪内では武者走り内側の窪地の縮小とともに御宝蔵(SB430）が構築されていた。

なお、盛岡城５期の盛岡城終末段階（幕末）になると吹上門西の櫓（SB440）が破却され吹上三社が建てられていることが確認された。

イ　本丸地区の調査

①本丸北東部

平成５年度に石垣の上面と石垣背面部の調査を実施、平成６年度に石垣下層の遺構調査を実施しており、不来方城期から盛岡城終末期（明治初期）までの遺構変遷が把握されている。

不来方城期の遺構は、北東部斜面を廻る犬走りのほか斜面裾の空堀が確認されているが、犬

走り・空堀ともに新旧２時期の変遷があり、古い空堀の埋土からは瀬戸窖窯期の鉄釉陶器、新しい空堀からは大窯期の灰釉陶器が出土していることから、それぞれ不来方城１期と２期に属する可能性が高い。犬走りや空堀は部分的な確認であったが、地形から盛岡城本丸の場所が不来方城の主郭と推定される。また、犬走りやそれに伴う斜面が本丸北面に回り込み、本丸・二ノ丸間の堀切は不来方城１期に存在し、不来方城２期や盛岡城１期～３期の縄張りも、この堀切を踏襲している。

盛岡城１期の遺構としては、現在見られる２期の石垣根石の内側に埋め込まれた根石列が確認されたほか、不来方城期の空堀を埋めた面に２個一対の門柱（SB115）が確認され、門跡の東側には石垣が伴っていることが判明した。当時の本丸は現在の本丸よりもやや狭く、本丸裏手の御末門に登る坂道と虎口は盛岡城２期・３期の縄張りとも共通しており、検出された石垣の石材は全て野面石となっている。

盛岡城２期～３期に構築された石垣は、１期の構造を外側に拡張して構築されている。石垣の上面では、明治期に北東隅の櫓台が大きく削られていることが判明し、櫓台内側の石垣下部と石垣の抜き取り痕跡が確認され、３間×３間の櫓台（SB130）の平面が明らかとなった。また、本丸殿舎（SB101）の北東隅部の礎石が雨落溝を伴って確認され、本丸内部の建物の遺構が良好に残存していることがわかった。この他便槽等の土坑、柱穴群などが確認されている。

②本丸北西部

本丸北西部では、石垣解体修復工事に伴う発掘調査が平成８年度に実施されている。

不来方城期の遺構としては、盛岡城２期石垣の下層に斜めに走行する落込みが確認された。埋土の状態から堀とも考えられるが、深さは確認しておらず明確ではない。

盛岡城１期の遺構は、盛岡城２期に構築された石垣内側に埋め込まれた石垣と、根石１個が確認されている。そのうち、北西部の小納戸櫓の下層では石垣の残存が不良であったが、その痕跡から自然の転石を半ば包みこむように石垣が構築され、小規模な櫓台が突出していたことが推定された。

盛岡城１期の石垣で残存状況の良い箇所は、盛岡城２期石垣の入隅に連続しており、上部ほど大型の矢穴の入った割石が見受けられることから、一部は２期に改修された可能性がある。

盛岡城２期においては、１期の石垣を埋め込み、地形を外側に拡張していることが確認されており、盛岡城３期末までこの構造に変更はないようである。

小納戸櫓（SB140）の櫓台は、明治期の公園造成で改変されているが、櫓台の根石列が確認されており、３間×４間（または 4.5 間）の平面規模が明らかになったほか、本丸御殿の北西部建物（SB107）が２期以上重複していることが確認された。

礎石はすべて抜き取られていたが、新しい時期の建物は、幕末の「霊承院様御代大奥御住居図」の建物平面に近似している。

同絵図によれば、検出された建物跡は南から仕舞所、御次、湯殿にあたる。小納戸櫓の石垣の復元には明治期の石段を撤去し、発掘調査成果に基づき上面３間×４間の櫓台を復元した。復元に当たっては、ハバキ石垣の石材を用いることとし、できるだけ矢穴が大きく、不定形に粗割された２期の石材に近い石材を選んで復元している。

③本丸南西部

石垣上面の発掘調査と石垣上部の解体を平成 10 年度、石垣背面の解体と発掘調査を平成 11

年度に、石垣下部の解体と発掘調査を平成 12 年度に実施している。

調査範囲においては、これまで不来方城期の遺構は確認されておらず、盛岡城１期に相当する時期の石垣の南西隅部が、現状の石垣から東に４メートル、北に 11 メートル内側に確認されており、石垣の石材は角石が粗割の花崗岩、築石が自然石の花崗岩を主体としている。

この石垣に続く面からは、淡路丸縁辺部の木柵が確認されているが、木柵の位置がかなり本丸に近接していることから、盛岡城１期に相当する時期の淡路丸の西側は狭隘であったことが想定された。

盛岡城２期には、本丸北東部・北西部と同様に盛岡城１期の石垣を埋め込んで外側に盛り土して曲輪を拡張しており、盛岡城３期にはこの構造を変えず、櫓台石垣を中心に石垣を積み直されている。

本丸南西部隅に所在した二階櫓（SB110）の櫓台は明治期に切り詰められ、石段が設けられていた。発掘調査では櫓台東側の基底部の抜き取り痕跡が確認されたほか、二階櫓部分は２間×３間の規模であったことが確認された。この櫓の東側に続く石土居の内側石垣の根石列も確認され、櫓との間には石組みの暗渠排水と溝、櫓に続く御殿（SB109・111）の御次の間の礎石、渡り廊下の礎石の抜取跡が確認された。

さらに石垣下側では淡路丸の吹上門北側に小規模な門（SB425）の礎石が確認されたが、層位から盛岡城３期の終わり頃に相当する時期の遺構と想定している。

④本丸南東部

本丸地区における遺構の保存整備を目的として、令和元年度から３年度にかけて遺構確認調査を実施している。

令和元年度と３年度は、盛岡城本丸南東部に存在した天守の基礎や、明治 39 年（1906）の岩手公園の整備により改変された天守台石垣の構造を確認することを目的とした調査を実施した。

調査の結果、天守台上面については、明治期以降に行われた四阿や石段設置、植樹等の公園整備による改変が著しかったが、天守台の北東隅から天守の礎石と考えられる石が検出されている。また、明治期の公園整備の際に改変された石土居の範囲については、石垣の積み方や築石の控えの違いなどにより、藩政時代の規模を想定することが可能となった。

令和２年度には本丸御殿の南東部を対象に調査を行い、大奥（南部家の居住区域）のうち、長局（中奥や大奥での南部家一族の身の回りの世話を行う女性が居住する部屋）や湯殿（風呂）、便所など生活に伴う建物の礎石やその基礎地業の根石などを確認した。

なお、これらの遺構は盛岡城の建物が存続した期間に数度の増改築が行われたものであることが確認されたほか、天守に葺かれていた瓦や祭祀儀礼の際に埋納された陶磁器、鉄製品のほか、日常生活に用いられた陶磁器片、古銭などが出土した。

また、本丸南側縁辺部に所在した石土居の確認調査を行い、天守台石段下から１箇所、調査区西側の園路西街燈付近から１箇所、合計２箇所から石土居根石を検出したが、公園施設の設置により大きく改変がなされていることが確認された。

ウ　三ノ丸地区の調査

①三ノ丸南東部

天端付近の隅石に変状をきたしていることから、平成26年度に石垣上面の発掘調査を実施し、

石垣天端石・栗石・盛土を確認した。いずれも盛岡城２期に相当する。栗石幅は約 1.5 メートルをはかり、北西部と同様に石の間には、盛土から流れ込んだ土砂が詰まっていた。不明門脇の石垣根石の確認も行ったが、調査区内では確認できなかった。

②三ノ丸北西部

北面石垣に孕み等の変状が認められることから、石垣修復が計画され、その事前の遺構確認調査として、平成 25 年度から令和２年度にかけて北西部上面の発掘調査及び根石の状況確認のため北下面・西下面の調査を実施した。

曲輪上面の調査では盛岡城１期・２期及び４期の盛土造成面が確認され、時期によって曲輪の拡張が行われていることが明らかとなった。また、４期盛土は宝永期の石垣周修復範囲に沿って２期盛土を切土して流し込まれていることから、宝永期の修復時に築石・栗石のみならず背面盛土も入れ替えていることが確認されている。

三ノ丸北西部の石垣天端には明和期の絵図等で土塀が描かれているが、令和元年度の調査で土塀の控柱と考えられる柱穴が栗石上面で検出されている。控柱跡は重複関係から大きく２時期（３小期）あり、宝永期の修復以降、少なくとも１回は土塀が建て替えられている。

北西部下面の調査では北・西面ともに根石を確認している。北西部西面の石垣は盛岡城２期であるが、根石は現地表面より２m余り直下に確認した。根石は西面全体を盛土により造成した後に盛土面を掘りこむ形で置かれている。

北面石垣の根石の前には１メートル大の花崗岩の転石や割石を用いた押え石を確認している。一部、押え石が無い部分が存在し、その場所が戦後に建てられた「花鳥園」の建物位置と一致することから、公園整備等により当時の地表面が大きく掘削されていることが判明した。

また、北面石垣の北側には新御蔵から延びる通路と門及び門に付随する石垣が「明和三年書上盛岡城図」には描かれているが、それらの確認のための調査を平成 26・27 年度に行い、門の柱跡や石垣の一部を確認している。

エ　台所地区の調査

①台所屋敷

台所地区はかつて「御台所」と呼ばれ、商人などを相手取る台所屋敷や、漆器の制作や補修を行う塗師小屋、武具所が置かれていた。

平成 28 年度に台所地区の整備を進めるに当たり、土塁跡、井戸跡等の確認調査を行ったところ、屋敷跡の礎石の一部や盛岡城 1 期・２期の土塁や堀跡等を確認した。絵図面に描かれている井戸は確認することはできなかった。

②塗師小屋

「明和三年書上盛岡城図」には「御塗師小屋」と記された建物が現在の台所地区の北側の位置に描かれている。この建物がどの様な性格の建物なのか、今後の史跡整備の基礎資料とするために発掘調査を令和元年に実施した。調査の結果、大量の濾殻を伴うＬ字形の掘立柱建物跡が確認され、「塗師小屋」は文字通り城内の漆に関する作業が行われていた場所であることが確認された。また、「塗師小屋」よりも下層面では多量の炭と鉄滓が投げ込まれた竪穴状の遺構を複数確認しており、「塗師小屋」が建つ以前に、この場所で鍛冶関連の作業を行っていたことを示唆している。

③台所門桝形・土橋

史跡整備に先立ち、平成 29～30 年度にかけて、土橋の残存状況や枡形の石垣の正確な位置などを把握するための調査を実施した。

石垣は、枡形の内側（北）に飛び出す形で造られた部分にあたり、築石は公園整備時に撤去されているが、根石４石と栗石を確認し、根石の隅石の位置と栗石の範囲から、この石垣の幅は約５メートルと考えられる。

台所門の東には、堀を挟んで重臣屋敷が立ち並び、そこから渡るための土橋が架かっていた。

これもやはり、公園整備時に撤去されていたが、一部は壊されずに残されていた。土橋の幅は約 10mで、一部、硬く締まった路面も残る。土橋の南端は土塁の裾と接しているが、そこに区画施設と考えられる石列を確認した。

オ　下曲輪地区の調査

盛岡城の正門に当たる下曲輪地区には藩政時代の土塁が今も残存し、その上に県指定有形文化財の銅鐘である「時鐘　奥州路磐手郡盛岡県城北更鐘」を吊るす鐘楼が存在する。平成 23 年に発生した東北地方太平洋沖地震によりこの鐘楼の基壇部に亀裂が生じ、また鐘楼の建物自体も歪みが生じたことから、倒壊の危険性が出てきた。そこで、土塁と鐘楼の保全を目的として、鐘楼の修理工事が計画され、工事着手前に鐘楼の基壇部分の発掘調査を行った。

当初、基壇部分は土塁の残存部と考えられていたが、鐘楼の４つの礎石直下より深さ３メートル以上のコンクリート製の基礎が発見されたことから、明治期にこの場所に鐘楼を移設した際に土塁を大きく掘削し、新たな盛土で基壇部分を造っていたことが判明した。

（２）施設整備工事等に伴う発掘調査

史跡指定地内では、公園施設等整備のために必要な措置に伴うもののほか、史跡の西側に所在する都市計画道路下ノ橋更ノ沢線拡幅工事に伴う調査が実施されている。また、史跡隣接地においては、道路拡幅工事のほか個人住宅の建築・増改築、商業施設の建築等に伴う発掘調査が実施されている。

このうち、都市計画道路拡幅工事に伴う発掘調査では、史跡西側縁辺中央部において坂下門（川口門）の柱跡が、北西部では枡形門枡形の石垣の一部、旧北上川に面する曲輪の縁辺部では木柵の跡や船着場の石垣が確認されている。

また、道路用地に所在した「彦蔵」の移設先として、かつて淡路丸南下側に所在した米内蔵跡の発掘調査を実施、敷石による地業面を確認している。さらに、道路拡幅工事に伴う調査では、史跡隣接地（史跡南西側）において、内曲輪を画する堀跡や出丸南辺の土塁のほか、平安時代の集落跡が確認されている。

トイレ等をはじめとする公園施設の設置や維持・修繕等に伴う発掘調査は、三ノ丸、台所（多目的広場）で実施されており、三ノ丸では不明門跡のほか不来方城期の堀跡、台所では台所門枡形の土塁が確認されている。

史跡北西部では商業施設建築（Est21）に伴う発掘調査が行われており、亀ケ池（内堀）北側の縁辺部が確認されている。

不来方城期の遺構（淡路丸南東部）

盛岡城１期の木柵跡（淡路丸南東部）

御殿跡等遺構確認状況（本丸北西部）

盛岡城１期石垣確認状況（本丸南西部）

坂下門周辺の遺構（淡路丸下西部）

米内蔵基礎地業（淡路丸下南部）

盛岡城１期石垣確認状況（本丸北東部）

天守台遺構（本丸南東部）

御殿跡①（本丸南東部）

御殿跡②（本丸南東部）

隅石天端付近（三ノ丸南東部）

根石押え石（三ノ丸北西部）

上面盛土（三ノ丸北西部）

板塀控柱跡（三ノ丸北西部）

石垣天端・栗石（三ノ丸北西部）

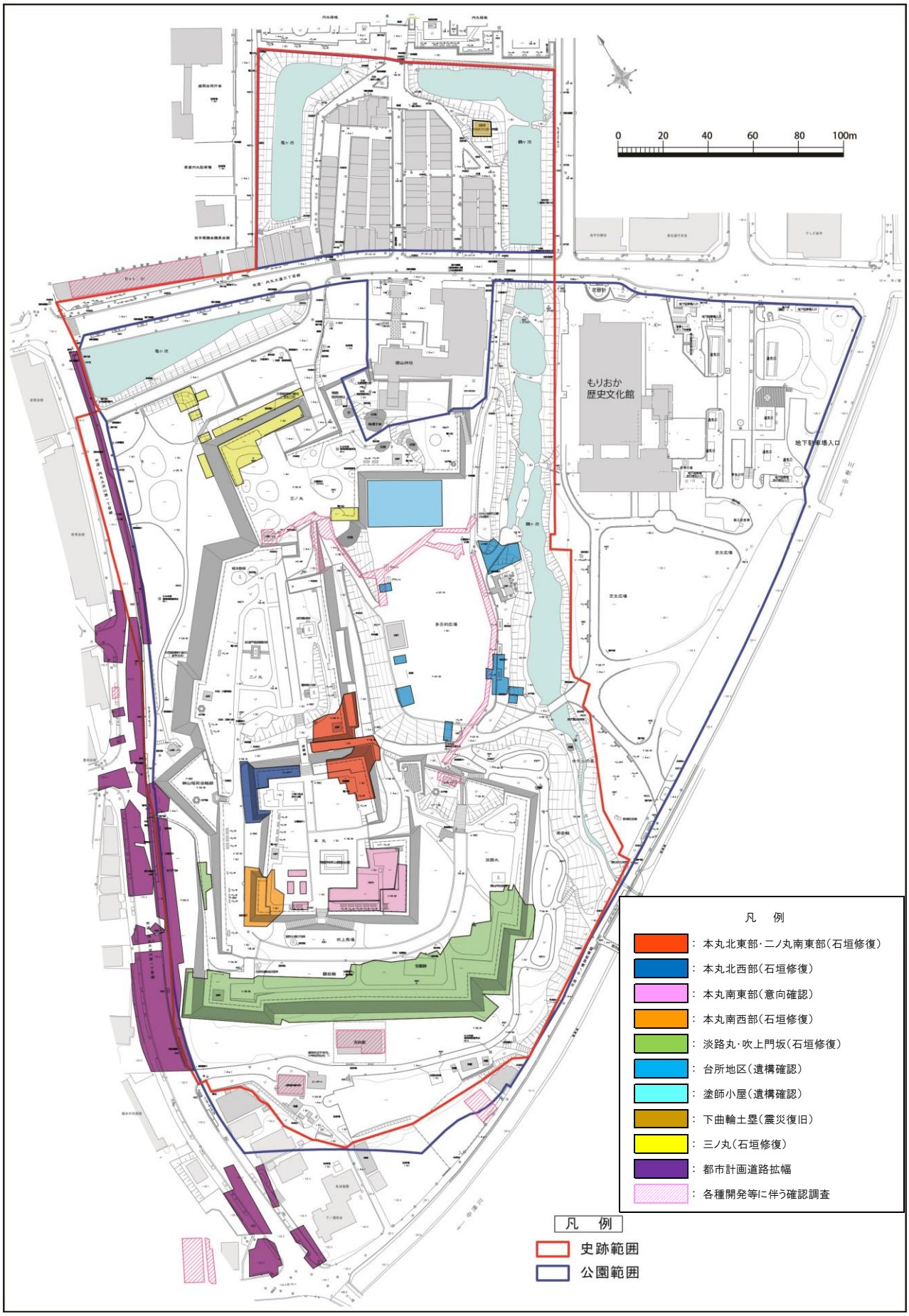
埋没石垣（三ノ丸北西部北側下部）

根石（三ノ丸北西部西側下面））

塗師小屋跡（台所北側）

台所屋敷礎石（台所南西側）

台所桝形石垣及び土塁（台所東側）



第18図　発掘調査実施箇所

表12　発掘調査の実績

年度	次数	調査地点	調査原因	面積（㎡）	調査期間	主な検出遺構等
S59	1	淡路丸南東部	石垣修復	217.0	7/1～8/31	櫓跡、排水施設、不来方城期の遺構
	2	鉛蔵周辺	石垣修復	76.1	7/1～8/31	小鍛冶跡、不来方城期の溝跡
S60	3	淡路丸南東部	石垣修復	560.0	6/15～10/31	二階櫓跡、排水施設、木柵跡、土塁
	4	鉛蔵・米内蔵周辺	石垣修復	1,890.0	5/8～8/14	鍛冶屋門周辺地形、補修石垣
S61	5	淡路丸南辺	石垣修復	1,008.0	5/6～10/9	窪地と焼土層、木柵、土塁、虎口
	6	米内蔵地区	石垣修復	66.0	4/25～6/7	補修石垣、敷石地業
S62	7	淡路丸南辺	石垣修復	420.5	5/11～4/10	淡路丸盛土層
	8	米内蔵地区	石垣修復	68.0	5/11～6/30	敷石地業
	9	内曲輪西辺（史跡外）	市道改良	1,175.0	9/24～3/8	枡形門枡形石垣、柵、川口門、船着場
S63	10	淡路丸南西部	石垣修復	823.0	5/9～8/23	南西部隅櫓、暗渠排水施設
	11	米内蔵地区	石垣修復	127.0	6/1～8/9	補修石垣、敷石地業
	12	内曲輪西辺出丸（史跡外）	市道改良	714.0	9/15～11/22	門跡、出丸土塁、土坑
	13	米内蔵地区	公園施設整備	270.0	11/4～11/19	敷石地業
	14	淡路丸北東部	公園施設整備	21.4	2/9～2/10	盛土層
	15	米内蔵地区	公園施設整備	106.5	2/16～2/17	盛土層
	16	台所地区	公園施設整備	93.2	3/3～3/8	台所門枡形
H1	10補	淡路丸南西部	石垣修復	418.0	9/8～10/17	南西部隅櫓下層の地形、柵跡
	11補	米内蔵地区ほか	石垣修復	220.0	9/8～10/17	堀跡
	17	内曲輪西辺出丸（史跡外）	市道改良	1,578.0	4/17～12/12	土蔵跡、溝跡、平安時代の集落跡、堀跡
	18	三ノ丸・台所地区	公園施設整備	147.5	11/16～1/24	堀跡、不明門跡、台所枡形
H2	10補	淡路丸南西部	石垣修復	16.0	9/3～10/17	不来方城期の盛土
	19	出丸（史跡外）	住宅建築	24.0	4/30～5/2	土塁、土坑
H3	20	本丸北東部	石垣修復	140.0	11/12～12/11	本丸二ノ丸間の掘切、冠木門跡
H4	21	二ノ丸南東部	石垣修復	249.0	8/24～9/30	土坑ほか
H5	22	本丸北東部	石垣修復	489.0	9/28～12/1	隅櫓台、本丸御殿礎石、築城当初石垣ほか
H6	22補	本丸北東部	石垣修復	79.0	3/25～3/30	門跡、土坑、不来城期堀ほか
H7	23	出丸（史跡外）	住宅建築	32.0	11/27	遺構なし
H8	24	本丸北西部	石垣修復	316.0	10/1～12/10	小納戸櫓台、本丸御殿礎石、築城当初石垣、土坑ほか
	25	本丸北西部	石垣修復			
H10	26	本丸北西・南西部	石垣修復	186.0	9/17～3/23	築城当初石垣ほか
H12	27	出丸・内堀（史跡外）	住宅建築	32.0	4/27	遺構なし
	28	本丸南西部	石垣修復	192.0	11/15～12/28	二階櫓台、本丸御殿礎石、石土居ほか
	29	内堀・御新丸	店舗等建築	522.0	7/26	内堀跡（史跡外は遺構なし）

年度	次数	調査地点	調査原因	面積（㎡）	調査期間	主な検出遺構等
H13	30	本丸南西部	石垣修復	330.0	8/4～10/13	築城当初石垣、門跡、土坑ほか
	31	吹上門周辺（明治期石垣）	石垣修復	109.0	9/1～10/7	明治期石垣
H25	32	三ノ丸・本新蔵地区	遺構確認	50.3	10/30～12/20	三ノ丸石垣根石・石垣背面構造等を確認
H26	33	下曲輪地区	震災復旧	97.1	6/16～7/17	土塁の一部を確認
	34	三ノ丸・本新蔵地区	遺構確認	243.8	10/1～12/22	三ノ丸石垣根石・石垣背面構造等を確認
H27	35	本新蔵地区	遺構確認	40.8	9/8～11/5	三ノ丸北西部下、本新蔵地区の遺構確認
H28	36	台所地区	遺構確認	520.0	11/2～12/22	台所地区の建物跡、井戸跡の確認
H29	37	三ノ丸北西部	石垣修復	289.0	7/25～12/20	三ノ丸石垣根石・石垣天端及び背面栗石を確認
	38	台所門土橋	遺構確認	182.0	11/17～12/20	台所門枡形石垣及び栗石・根石、土橋跡を確認
H30	37補	三ノ丸瓦門北袖南	石垣修復	260.0	9/27～12/21	三ノ丸石垣の背面栗石・盛土、土塀柱列を確認
	38	台所門土橋ほか	遺構確認	250.0	10/25～12/21	台所門枡形石垣及び栗石・根石、土橋跡を確認
R１	39	台所塗師小屋	遺構確認	600.0	6/10～9/5	塗師小屋跡を確認
	40	本丸天守	遺構確認	176.4	9/5～11/29	本丸天守跡及び天守台石垣の確認調査
R２	37補	三ノ丸瓦門北袖北	石垣修復	55.2	5/18～7/31	三ノ丸石垣背面の栗石・盛土、土塀本柱・控柱列を確認
	41	本丸長局	遺構確認	159.8	7/29～10/30	本丸御殿内の長局礎石・根石などを確認
R３	42	下ノ橋教会	教会新築	102.4	6/23	内堀跡
	37補	三ノ丸北西部北面石垣	石垣修復	102.3	8/17～12/9	三ノ丸北面石垣の栗石・盛土、土塀柱痕跡
	40補	本丸天守台	遺構確認	176.4	11/18～12/9	江戸期の天守台天端石・明治期の天端石、栗石層を確認
	43	本丸南辺石土居	遺構確認	69.0	11/18～12/9	江戸期石土居根石、本丸南面石垣栗石を確認
R４	37補	三ノ丸北西部北面石垣	石垣修復	97.0	5/10～11/22	三ノ丸北面石垣の栗石・盛土・根石・押え石
	44	本丸南東部及び南西部の一部	遺構確認	204.1	8/29～12/15	江戸期～明治期の礎石、天守台・石土居の根固石
計				16,293.7		

※調査次数の塗色は、調査実施箇所図と対応している。